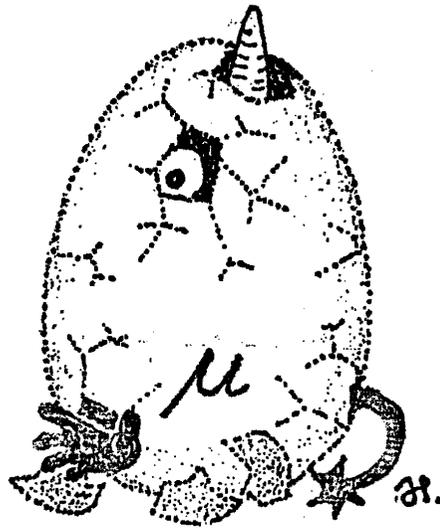


日本生物學會誌

第 27 号



日本生物學會

1989年 10月10日

第 27 号 も く じ

奥野良之助：魚 陸に 上る (17)	993
松永明美：反原発 — 汚染食品を食べて ガンになりたくない	1009
栗間修平：ねずみとり戦記	1011
青丹 斎：K氏のケチについて	1020
春咲小紅他：リレー落語	1022
青丹 斎：マラリア異聞	1026
万年学生：大学生活 18ヶ条	1027
第4編集局長：日本生物学会会長室のご案内	1032

編 集 後 記

真 正 編 集 後 記

会 計 報 告 (1987・88年度)

魚 陸 に 上 る (A7)

— 魚 から 人 間 まで の 歴 史 —

奥 野 良 之 助

第 4 章 無 が く 綱

ここでちょっと、お断わりしておかねばならぬことがある。それは、今年中に創元社（あの悪名高い「生態学入門」なる本を出した出版社である）から、「魚 陸 に 上 る — 魚 から 人間 までの 歴史」という本が出版されることになっている。やはり、せきつい動物がいかにして生まれ、魚がどのように上陸し、サルがいかに樹から落ちて人間になったかという話を書いてある。著者も表題も同じだから、まあ同じようなことが書いてあるのだが、実は内容は全く異なっている。どこが違うかといえば、まず第一に、この論文に見られる格調の高さが、この本にはない。たとえば、「今の東大教授は入試競争があまりなかったころの学生のなれの果てだから、無がく類のようなものだ」といった、高尚な話はすべて、本でははぶいてある。さすがにちょっと書けないもんね。この論文の価値は、このような格調高いむだ話にあるのだから、それをすべてはぶいたこの本は、大して中身がない。といて、だから読むな、とは言わない。読みたい人の向学心（好奇心といった方が当てるか）に水をさすような真似は、大学教官である私にはできない。まだ出てない本を買うわけにはいかないが、そのうち出るから買って読むことは止めない。

それはともかく、同著者、同題名の本が出たからといて、この論文の連載を止めるわけではないことを、言っておきたかっただけである。大方の期待に反して、この連載はまだまだ続く。

さて、先回、といっても丸十年前だが、現生の無がく類、ヤツメウナギとメクラウナギの話をした。今回は、そのはるかなご先祖、やはりアゴのない甲皮魚類（オストラコダーム）の話をする。ここでまたちょっと断わっておくが、たいていの本、というよりすべての本では、これを甲皮類と書いてある。それをわざわざ甲皮“魚”類としたのは、別に大した意味はない。甲皮類では、それがどんな生き物かわからないが、甲皮魚類とすれば、ああ、魚だな、とわかる。それだけの話である。もっとも、もうお忘れと思うからもう一度書いておくが、現在のせきつい動物の分類では、アゴのない無がく上綱とアゴのあるがく口上綱の2つにまず分けることになっているから、無がく綱は「魚」ではない。したがって、甲皮魚綱とは書けないのだが、私は、無がく

網も魚の中に入れてから、甲皮魚類と書いても差し支えない。

いまからおよそ5億年の昔、オールドウ”イス紀という時代に、ホヤの幼生は遂に“魚”となった。といて、コイやマグロといった、すいすい泳ぐ魚を想像してはいけない。出来立てホヤホヤの魚だから、多くを期待するのは無理というものである。代表として、頭に甲をかぶっているから頭甲類と、きわめて単純に名付けられた一群の魚に登場してもらおう。ここで1枚絵を見せれば説明が簡単なのだが、頭甲類の絵は前号ですでに出してしまったから、ここでは再録しない。どうしても見たい人は、26号953ページを開いてほしい。もっとも、私が画いた絵だから、苦勞してまで見る値うちはない。

大きさは20～30センチくらいで、頭部はがん丈な骨質の箱となり、そのてっぺんに目が2つ、下側にアゴのない口が1つ、丸く開いている。体の後半は縦長のウロコにおおわれ、上半分が長く伸びた、サメ型の尻尾に終る。頭と体の境いのあたりから左右につき出した胸びれのようなものがついているが、棒のような形で、現在の魚の胸びれのように、泳ぐのに役立つとは思えない。あとで説明するが、この魚はいつも水底にはりついていて、滅多に泳がなかった。といっても、だれも見た者はいない。そこでこの胸びれ状の突起は、泳ぐためではなく水底をはいまわるためのものであったにちがいない、ということになっている。これももちろん、本当かどうかはわからない。現代でも、リクルートの株の行方のように、本当のことはたいていわからないのだから、5億年昔の本当のことなど、わかるはずはない。ついでに、これも本当のことかどうかわからぬ話をつけ加えておくと、この“胸びれ”は、今の魚の胸びれとは関係がない、ということになっている。今の魚はこの頭甲類の子孫ではなく、したがってその胸びれが今の魚に受け継がれてきたはずはないというわけである。では、なぜ同じようなところに同じようなものを生やしているのか。どうも、水の中に住んで魚の形をした生き物は、ここに突起を生やしたくなるらしい。より科学的に言えば、そうした方が生活により便利となる — それほど“科学的”な説明とも思えないが — というわけだが、そんなこと言うと、それがいかに生活に役立っているのかを説明しなければならぬハメにおちいるから、ここではあくまで魚の趣味で押し通すことにする。「カラス、なぜ鳴くの？ カラスの勝手にしょ」の精神である。

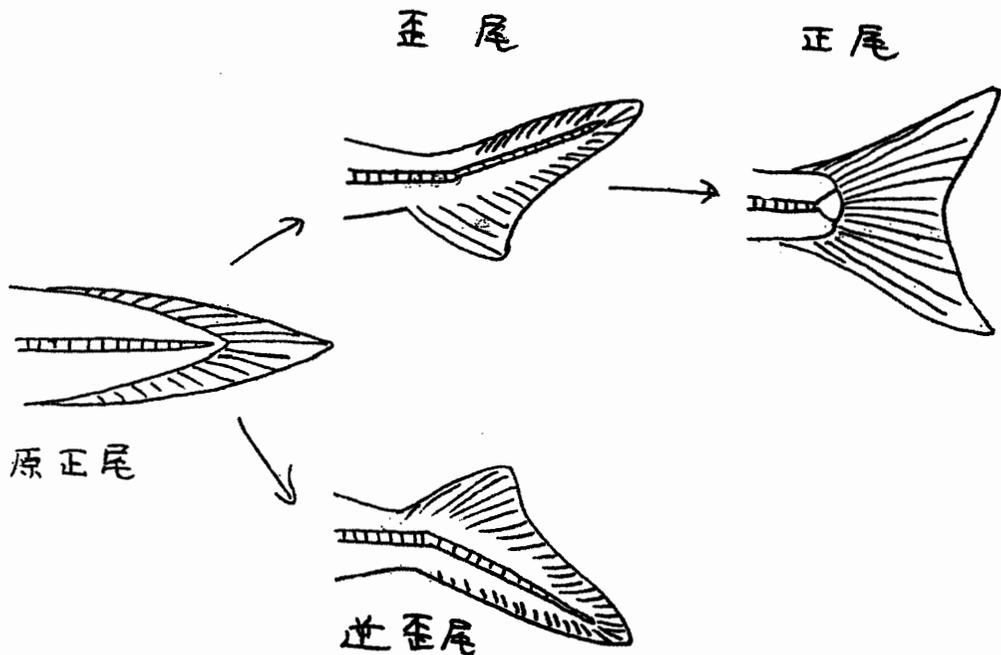
さて、化石からわかるのは、その形だけである。それがどんな生活をしていたかは、直接知ることはできない。ところが、生き物の形というものは、ずいぶん色々なことを語ってくれる。クジラを見て地上を歩いていた生き物だとだれも思わないし、ゴジラが空を飛んでいたと想像する人はいないだろう。もっとも、口から火を吐くとも思えないが、生物はそれぞれ特有の生活をしている。その生活をうまく行なうために、自分の体の形をいろいろに変えているのである。そこで、生物の形をこまかく観察すると、その生き物がどんな生活をしていたかが、だいたいわかるのである。

頭甲類の目は頭のてっぺんについていて、これは、敵が常に頭上からやってくるということを

示しており、その魚が底生であった証拠となる。つまり、上方さえ警戒していればよいのであって現生の魚でも、コチやエイなど底生魚はすべて目は上についている。

尾びれは、上半分が長く伸びたサメ型であった。これを学問的には歪尾（ワイビ）という。といっても別に不正な尻尾というわけではない。それどころか、古代の魚の大半が採用し、いまにいたるまでサメに受け継がれている、唯緒正しい尾びれである。この尾びれもまた、その魚が底生であることを示す証拠である。この型の尻尾を左右に振った場合、上半分は大きく水をかき、下半分はわずかしかかかない。必然的にそれは、体を下の方へ押し下げるように働く。つまりこの型の尾びれの所有者は、泳げば泳ぐほど沈んでいくのである。

ここでついでに、魚の尾びれの進化を解説しておこう。先祖に当るホヤ幼生の尻尾は真直ぐ伸びていた。だから、一番初めの魚の尻尾も、真直ぐの棒状であったにちがいない。これではしかしあまりにも能率が悪いから、上下に皮膚のヒダをつくって、水をかきやすいようにした。このタイプの尾びれを「原正尾」という。ちょうど、ウナギの尻尾と同じ形である。といっても、ウナギの尾びれは原正尾ではない。ウナギは、泳ぐよりも泥やすき間にもぐりこむ生活を選び、じまになる尾びれの出っばりをなくしたのであって、それがたまたま尾びれの先祖形である原生尾に似てしまったというにすぎない。真の原正尾の所有者は、だから、化石の中にさがさなければならぬのだが、どういうわけかこれが見つかっていないのである。あまりに能率が悪かったのてたちまちすたれ、化石として残るひまがなかったのか、もともとそんなものは存在しなかったのか、どちらか



である。もし存在しなかったとすれば、尻尾は初めから曲っていたことになり、尻尾をもって象徴としているせきつい動物にとって、いよいよ名誉な話ではなくなる。

尾びれの能率を向上させるには、左右に振った時水に当る面積を増やす以外にない。それも、単に皮膚を伸ばしたのではふにゃふにゃで役に立たない。何か支柱が必要である。そこで、せきついを曲げて支柱にすることにした。ここで困ったのは、せきついが1本しかないことである。上に曲けても下に曲けても、尾びれは上下不そろいにならざるをえない。魚はどちらに曲げるかの決断をせまられることになった。そして、ここで決断の根拠としたのは、底生の生活をえらぶか、自由遊泳の生活をえらぶか、ということであった。大半の魚は底生をえらび、泳げば沈むように、せきついの後端を上へ曲げた。ごく一部の魚だけが自由遊泳にあこがれ下に曲げて尾びれをつくった。これを、ワイ尾の逆だから「逆ワイ尾」という。

この逆ワイ尾の魚の子孫は、どういうわけか古代のうちに絶えてしまう。自由にあこがれるような奴は長生きできないのかも知れない。慮にへばりついて耐え忍んだワイ尾の魚が、その後のすべての魚を生み出すのである。現生の魚のうち、サメはこの先祖形のワイ尾をそのまま残していて、だからこの尻尾はサメに特有なものだと考えられがちなのだけれども、タイやヒラメのようなふつうの魚、硬骨魚類、も、もとを正せばみんなサメ尾であった。硬骨魚類が上下相称の「正尾」となったのは、ごく最近、といっても1億年ほど前の白亜紀である。硬骨魚類は、せっかく上に曲げたせきついても再び退化させ、その代わり尾びれのつけ根に3角形の骨（尾板という）を発達させて、それに上下相称の尾びれをつけるようになる。それではやはり支柱がなくてふにゃふにゃになりはしないかと、心配される向きもいるかも知れないが、このころになると、き条といって丈夫な筋ができていて、せきついの支えなどなくても、しっかり水をかけるようになっている。

正尾のよいところは、左右に振ると真直ぐ進む点である。ワイ尾や逆ワイ尾では、こと志に反して上や下へ行ってしまう。正尾なら、上でも下でも右でも左でも、行きたい方向を向けば真直ぐ行ける。こんな便利なものなら、もっと早く開発しておけばよかったのに、5億年前に起原した魚は、ようやく1億年前になって初めて手に入れた。何と4億年もかかっているのである。この遅れは、ふつうウキブクロの発達と関連させて説明されている。そこで、ウキブクロの起原なるものを物語らねばならなくなった。

釣りをしたことのある人ならご存知と思うが、ちょっと深い所から一気に釣り上げると、魚のおなかがばんばんにふくらんでいることがある。魚の内臓と背骨の間に、白い丈夫な膜でできた大きな袋があって、その中に気体がつまっているのがウキブクロだが、液体とちがって気体は圧力が下がるとふくらむくせがある。水深10メートルで1気圧だから、10メートルから釣り上げられた魚のウキブクロは2倍に膨張する。だからおなかがふくれ上ってしまうのである。こうなると魚は、あお向けに浮かんだまま全く泳げない。注射器で横腹から空気を抜いてやると、もとへもどる。

瀬戸内海では、目の下1尺もある大タイが水面に浮かび、ばたばたやっける“浮きタイ”にぶつかることがあり、タイの手づかみができるが、これは、常に数10メートルの深い所にいるタイが、狭い海峡などで急に早き潮流に押し流され浮き上って、ウキブクロをふくらませてしまうために起る。こんな危険なものを、魚はなぜ開発したのだろうか？

我々も同じだが、魚の体もだいたい骨と筋肉からできている。骨も筋肉も水より重い。それで余程肥満型の魚でないかぎり、じっとしているとだんだん沈んでいく。沈みたくなければ泳がなくてはならない。働くのが仕事の人間でも働かない方が楽なのと同じく、泳ぐのが商売の魚だって24時間泳ぎ続けてはくたびれてしまう。そこで、このウキブクロが役に立つのである。その水深にウキブクロ内の空気量をうまく合わせておけば、いつでもどこでも魚は、一切の努力なしに、浮きも沈みもせず、じっとしていることができる。ウキブクロの一部には、血管が集まったガス交換器があって、血液中のガスをウキブクロの中に放出したり、逆にとりこんだりして、空気量を調節できるようになっているのである。ただし、このガス交換のスピードはおそく、急に釣り上げられたりした時は間に合わず、ふくらんでしまうのである。

現生のたいていの魚は、どことも連絡していない完全に閉じた袋としてのウキブクロを持っているが、中生代や古生代の魚のウキブクロは、のどの奥のところ消化管とつながっていた。口から空気を吸いこんでウキブクロへ送りこむことができたのである。逆に、ウキブクロの空気を口から吐き出すことも可能であった。その上、ウキブクロと血液との間でガス交換ができるというのだから、何のことはない、我々の肺と同じことである。ウキブクロの前身は肺であった。

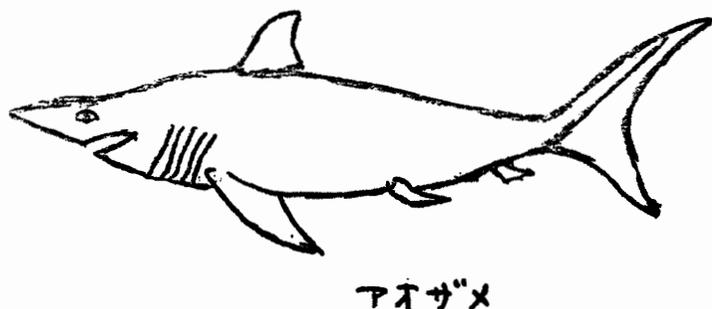
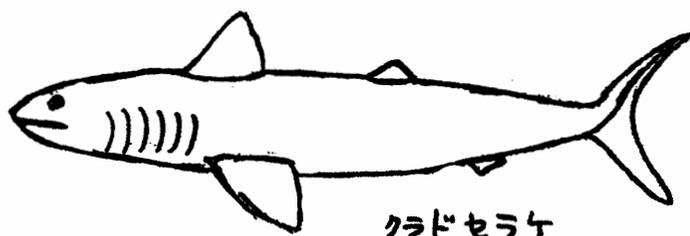
ところで、水中に住む魚が、口から空気を出し入れして肺呼吸する必要はどこにあるのだろうか。ここで、この連載の第1回、いまを去る11年前、1978年4月1日発行の本誌第2号60ページを思い出していただきたい。無理とは思いますが、そこに、こう書いておいた。「今から3億年ほど前、デボン紀と呼ばれている時代のことである。それまでよく雨が降り、湿潤であった気候が次第に乾燥＜乾燥やろ＞して来た。河は干れ、小さな池や沼は干上り、大きな湖でさえよどみ、にこってきた」有名な、といっても知らぬ人は知らぬし、知らなくても全くかまわないのだが、デボン紀の大かんばつである。この結果、魚は陸に追い上げられて両生類となり、陸生せきつい動物の進化がはじまる大事件だが、水中の酸素不足に苦しんだ魚たちがこの時肺を発明したのである。その肺は、陸に上った両生類を通して我々の肺となった。しかし、海へ逃れた魚にとって、肺は無用の長物でしかない。デボン紀以来2億数千万年、これをいったいどうしようかと思ひ悩んだあげくようやくウキブクロとして再利用しようと思いついたのが、1億年前の白亜紀であった。人間社会もこれくらいのテンポで進めば、もう少し住みやすいと思うが。

ついでにいうと、ウキブクロを持っているのは硬骨魚類だけであって、軟骨魚類（サメとエイ）は持っていない。だから、サメを釣り上げても腹はふくらまない。もっとも、ナヌカサメというサ

メは釣り上げると自分で空気をのみこんでふくれ上るそうである。これではまるでフグだが、ここの話には全く関係がない。サメにはなぜウキブクロがないのか？ それは、デボン紀のかんぼつ
の時、干上る淡水を早々に見捨てて海へ逃げ出したから、肺をつくらなかったためだという。酸素
が充分ある海の中で、体の中に空気の袋をつくることは至難のわざであろう。こうして現生のサメ
は、常に沈没の危険にさらされ、生まれてから死ぬまで泳いでいなければならない。淡水域での苦
勞をいやがった先祖のむくいだ、というわけだが、3億年も前の先祖のむくいでは、サメもかわい
そうである。

話は、尾びれのことであった。1億年前、ウキブクロを完成した魚は、もはや浮いたり沈んだり
することに悩まなくてもよくなった。上昇・沈下はウキブクロにまかせ、尾びれはもっぱら、推
進力をあげることだけ考えればよくなったのである。こうして、上下相称の正尾がようやく採用さ
れた、というわけである。科学者というものは、いかなる難問に対しても、かくの如く理路整然と
した論理をつけることができる。

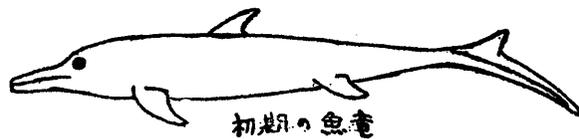
と、私もこれまで説明してきたのだが、これを書きながら、気がつかなくてもよいことに気が
ついてしまった。それは、現生のサメの尻尾である。たいていのサメは、上半分が発達した典型的
なワイ尾である。そして彼らは浅海に住み、あまり活動しない昼間は、海底に沈座して寝ている。
先祖のむくい苦勞しているところか、苦勞をいやがる遺伝子をそのまま受け継いでいるようであ
る。この遺伝子のおかげで底生生活を楽しみ、必要がないから尾びれの改良をさぼってきたのか、
尾びれがどうしても改良できなかったのか、底生の自墮落な生活から“ひれ”を洗えなかったのか
はわからないが、そしてわからなくとも差し支えないが、この型のサメは、これでよい。いけない



のは、ホホジロサメ、アオサメ、イタチサメと、そうそうたる人くいサメが顔をそろえる、外洋性のサメの一群である。彼らは、ウキブクロを持たないにもかかわらず、沿岸での怠惰な生活を止め雄々しくも、といっても雌も含めてだが、外洋へ乗り出した連中である。深さ数千メートルの外洋では、疲れたからといって泳ぎを止めるわけにはいかない。また、海底で大して逃げない顔を拾い食いすることもできず、勢い逃げる獲物を追って泳がなければならぬ。もっとも、カツオやマグロには追いつけず、延縄（はえなわ）にかかったマグロをちゃっかり失敬するサメもいる。1本数百万円もするマグロが頭だけ上ってきたりすると、漁師はそれこそ頭にくる。時々ぱっくりとひとのみにして釣針にひっかかり、ひき上げられるサメもいるが、日ごろのうらみとばかり、よってたかって棒で撲殺されるそうである。それはともかく。外洋性のサメはすばらしい泳ぎ手でもあり、そしてその尾びれは、上半分にだけせきついの支えがはいっているワイ尾であることは間違いないが、外見的には上下相称、したがって機能的には正尾と同じなのである。そういえば、あらゆるサメの先祖として有名な、デボン紀の淡水地層から掘り出されたクラドセラケなる化石は、尾びれ下葉が上葉と全く同じ位発達していて、外形だけ見れば正尾である。彼らはもちろんウキブクロはない。つまり、ウキブクロなどなくても、体を真直ぐ推し進める機能的な“正尾”は、つくることが可能なのである。

こうして、ウキブクロの完成が正尾をつくり出したという説は、破端を来してしまった。といって、それに代わるべき新説を考えるのも面倒である。子供が独立して扶養義務がなくなったとたん、労働意欲が急激に低下してしまったので、あまり面倒なことは考える気がしなくなった。まあともかく、魚は長い間かかってゆっくりと、原正尾→ワイ尾→正尾と尾びれを改良してきたのである。

逆ワイ尾の方は、古代にいくつかの魚で見られただけで、その後魚の世界では絶えてしまった。ところが、面白いことに、魚以外のせきつい動物に採用されるのである。中生代は恐龍に代表されるハ虫類の時代だが、ハ虫類は海へも進出する。今でもイリエワニは時々海へ泳ぎ出すらしいが、



中生代の海にはゲオサウルスという海専門のウミワニがいた。おそらく卵を生む時以外は陸に上らなかつたらしい。というのは、その4本の足がすべてひれに変わっていたからである。そして、長い尻尾の先に尾ひれまで発達させていた。この尾ひれが、せきついで下へ曲げた逆フィビだったのである。また、同じ中生代の海には、名高いイクチオサウルス、すなわち魚龍がいた。この尻尾がまた見事な逆ワイ尾なのである。(前ページ参照)逆ワイ尾は体を上へ押し上げる、自由遊泳型の尾ひれであった。この場合は、しかし、彼らが自由を求めてそうしたのではなく、すでにエラを失なって肺呼吸をしていたハ虫類だから、単におぼれるのが恐かっただけにちがいない。魚龍は三疊紀に出現するが、その初期の種類は、尾ひれ下葉が長く伸びた典型的な逆ワイ尾であった。ところがジュラ紀から白亜紀にかけて現われる後期のものは、上葉を同じくらい発達させて、機能的には正尾型になっている。泳ぎにみがきがかかって、おぼれる恐怖がなくなったのにちがいない。

話が多少前後するのは止むをえないが、数ページの間の数億年も前後すると、書く方も読む方も疲れてしまう。話をもとにもどして、無がく綱頭甲類の生活の探究を続けよう。目が頭の上についていること、尾ひれがワイ尾であることは、その魚が水底で生活している、つまり底生魚であることを示している。これに、腹面が平たいことと口が下についていることを加えれば完璧である。頭甲類は間違いなく底生魚であった。何を食べていたのか？ 口にはアゴもなく歯もないから、何かにかみつけたはずはない。大きな頭甲の中はがらんどうで、左右にたくさんの小さなエラ穴が並んでいる。口から水を、泥と共に吸いこんで、有機物や小さな虫などを、エラ穴でこし分けて食べていたに相異なる。朝から晩まで、夜もまた、水底にへばりついて泥をのみ、ごくまれにふらふらと水中にまい上って移動する。何年生きたのか知らないけれど、全く何の面白味もない生活である。いくらのおぼれした生活にあこがれている私でも、頭甲類にはなりたくない。

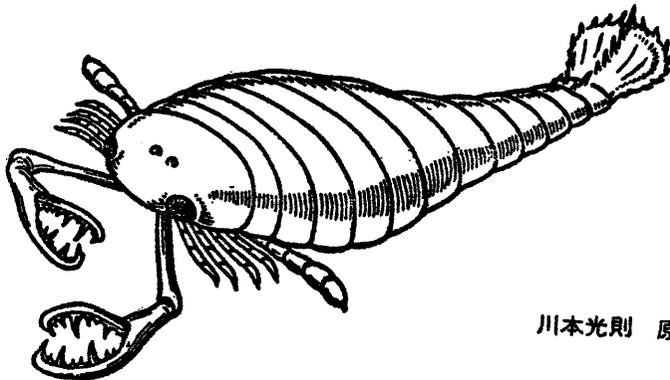
この頭甲類の味気ない生活に、少しは色どりをつけてやりたいと考えた学者がいた。頭甲の左右の下側に、表面がざらざらになっている部分がある。脳から神経がここへ達しているのだから、これは何らかの器官であったのだろうと思われる。ついてにいうと、化石なのになぜ神経の配置がわかるのかといえ、この頭甲の内側にさまざまなかぼこがあって、これを克明に調べた結果、脳とそこから出ている神経の形が、およそのところ判明したのである。といっても、私は見たことがないから責任は持たない。そういえば、この連載は初めから終りまで、見たことのないものについての話だから、初めから終りまで責任を持つつもりはないのであって、いちいちこんなことを書くまでもなかった。さて、この器官がいったい何物であったかについて、いろいろな説が出されているが、その中に、これは発電器官ではないか、という説がある。魚が発電器官を持っている例はいくつかあって、中でも南米アマゾン河のテウキウナギとアフリカのデンキナマスとが最も有名である。デンキナマスはナマスの仲間であるが、テウキウナギはウナギではない。では何の類かと聞かれると困る。ナイフ・フィッシュの仲間だといえよいのだが、そうすると今度はナイフ・フィッシュ

なるものの説明をしなければならぬハメにおち入り、ひいては硬骨魚類全般の解説までいってしまう恐れがある。まあ、いずれはしなければならぬが、今の見通してはそこまで命が持たぬだろうと思っているので、やらなくてもよいことをわざわざやることもない。昔、水族館にいたころ、「電気を出す魚たち」という特集展示をやったことがあり、発電魚の話はよく知っているのだけれど、ここではおさえて、頭甲類に話をもどそう。

現生の発電魚の中には、ごく微弱な電気しか出さないものもいて、彼らはそれを通信用に使っているのだが、頭甲類のこの器官はなかなか大きく、これが発電器官だとすれば相当強力なものだったに違いない。するとその用途は、デンキウナギやデンキナマスのように、餌をしびれさせるか敵をおどかして追いはらうか、だったであろう。ところが、すでに述べたとおり、頭甲類は泥の中の有機物や小さな虫しか食べない。有機物を感電させても何の役にも立たないだろう。そこでこれは、敵を防ぐためのものにちがいないということになる。ところが、頭甲類が現われたころ、そこにはアゴのあるせきつい動物は全くなかった。つまり、かみつけるものは存在しなかったのである。これでは、敵を追いはらう必要もない。あれやこれやで発電器官説は評判が悪く、すたれてしまった。今では、これはおそらく、水流や水の振動を感知する、現在の魚の側線と同じような感覚器官だろうということに落ちついている。合理的だが、何の面白味もない説である。

ところが、そう簡単に説明できないこともある。頭甲類、それに後に説明するが同じ無がく綱の翼甲類などは、例外なく頭ががん丈な装甲をかぶっていて、だからこの古代の無がく魚、甲皮魚類のことを、別名甲ちゆう魚ともいう。かみついてくる敵がいないのに、彼らはなぜ、装甲で武装しなければならなかったのか？

この問題について、例のローマー大先生が面白い説を出している。その時代の海には、ユーリプテリッドという、サンリの化物のような甲殻類が住んでいた。巨大なハサミを備えた肉食者で、河川から少し河をさかのぼり、これといって武器のない無がく魚をねらっていたというのである。



川本光則 原図

最大3メートルに達したというから、せいせい30センチの頭甲類の手に負える相手ではない。そこで、せめて頭に甲をかぶり、かじられないようにしたというのが、ローマーの説である。無がく魚はすべて淡水性で海へは行かなかったが、これも大サソリが怖かったからだということになっている。のちに、アゴを得て巨大化した板皮魚類の一部やサメは、大サソリをものともせず、堂々と海へ進出している。

これに対して、大きいけれどもろまな大サソリを、まだ初まりとはいえ魚が怖がったはずはない、と反論したのが、せきつい動物ホヤ起源説をとなえたペリル先生である。ペリルは、海にくらべて淡水にはリン酸塩が相対的に多く、海から河へはいったばかりの魚の先祖には、リン酸塩の排出機構が未発達だったからにすぎないという。血液に過剰にとけこんだリン酸塩は、ところかまわずしみ出して行って、カルシウムと化合する。骨は、今にいたるまでリン酸カルシウムである。それなら全身くまなく装甲でおおわれなければならぬのに、なぜ頭だけに限られているのか？ リン酸は、血流の停滞している部分でより多くしみ出すであろう。ペリルはそれ以上コメントしていないが、我等がはるかなご先祖甲皮魚類は、頭がいちばん血のめぐりの悪い生き物であったらしい。我々は、頭の悪いことを恥じる必要はない。それは、5億年の伝統を受け継いでいるのである。

血のめぐりも悪く、大して泳げず、アゴも歯もない甲皮魚類は、しかし、全く競争相手がいなかったために、いろいろな生活場所を開発し、その生活に合うように体の形を変え、たくさんの種類に分かれて大いに繁栄しはじめた。主なグループは4つあって、以下の通りである。

頭 甲 目 欠 甲 目 翼 甲 目 腔 リン 目

頭甲目についてはすでに述べた。欠甲目というのは、装甲がこまかく割れてウロコのように体をおおっている、いわば装甲のない甲ちゅう魚である。翼甲目は、頭甲目以上にがん丈な頭甲を持つ。腔リン目も装甲がなくなっているが、ちゃんとした化石が見つかっていないので、どんな生き物だったのかよくわからない。欠甲目と翼甲目の代表の図は、やはり本誌前号に載せておいた。

水の中という生活条件を考えると、大きく分けて、水底と水中の2つがある。このうち水底を占拠したのが底生の頭甲類であった。上を見ると、水中の自由空間が大きく開いている。これを利用しない手はないと、水底高く泳ぎ始めたのが欠甲類である。そして泳ぎやすいように形を変えていった。まず、体全体を流線形にして水の低抗を少なくする。尻尾は逆ワイ尾を採用して沈みにくくし、目は上下左右どこでも見るできるように頭の横につける。こうして遊泳型の欠甲類は甲皮魚の中で珍しく、スマートな魚となった。ただし、大きさはせいせい10センチの小魚である。口は体の前端に丸く開き、アゴはない。イフシと同様、水中の小動物と小植物、つまりプランクトンを水と共に吸いこんで、10対もある小さなエラ穴でこしわけて食べていたとされている。

全体の形を見ると、欠甲類はすいすいと上手に泳げたように思える。でも、本当はあまりうまく泳げなかったらしい。1枚板の装甲こそなくなったが、全身に分厚いウロコをびっしりと着こんでいて、泳ぎに必要な身のこなしの巧みさはとうていできなかつたにちがいない。また、水族館で見るとよくわかるが、現生の魚は、胸びれや腹びれ、それに背びれや尻びれもうまく使って、さまざまな泳ぎ方をしている。特に胸びれは重要で、魚はこれをプレーキとして使ったり、停止した時の姿勢の維持や、曲ったり後進したりする時にも、実に複雑微妙な使い方をしているのである。ホンソメワケベラという小さなベラがいて、実をいうとこの名前はホンソメワケベラという方が正しいのだが、印刷した時のソトンのミスプリントを見逃したために、ホンがホンになってしまったのだが、生物の学名には、いちどつけるとそれがいかに不合理であっても直してはいけないという規則があり、日本名には別にそんな規則はないにもかかわらず、遂にホンソメワケベラで通ってしまった不幸なベラである。このベラが、他の魚の体表についている小さな寄生虫（主として甲殻類）をとって食うという変な習性を持っていて、数々の寄生虫に悩まされている魚は、このホンソメワケベラのいるところへ集まってくる。その時彼らは、多分ベラを驚かさないためだと思うが、静止し、ひれの動きまで止めてしまう。すると、魚はだんだん傾きはじめ、遂には横倒しになったり、倒立したりして、徐々に沈んでいく。魚の泳ぎや姿勢の維持に、ひれがなまなくてならないものであることが、これを見ていると実感できる。近ごろは、たいていの水族館でホンソメワケベラを飼っているから、御用とおぼろげのない方は、まあ当分雲々の大半がそうだと思うが、じっくりと観察されたい。

その大切なひれが、欠甲類にはちゃんとそろっていないのである。前号の図を見ていただければ一目でわかるが、尾びれ（逆ワイ尾）と、どういふわけか立派な尻びれは発達させているが、背びれは持っていないのである。そして、最も大事な胸びれもない。ない、と言いつつ、正確に言えば間違いないのだが、少なくとも現生の魚のような、独立した胸びれはない。その代わり、体側の下側に、長く続くひれがついている。もともとひれなるものは、体表からの薄い皮膚の突起であって、尾びれの場合は推進力の増加のためだが、そのほかのひれは、体の回転や横すべりの防止のために発達したものである。欠甲類のこの体側下側のひれも、同じ目的のために発達したものだと思われる。そのひれの前と後の部分だけが残って中間がなくなったのが、胸びれと腹びれの起原だということになっているのだが、欠甲類はいわばその前段階を示しているともいえる。ただし、現生の魚が欠甲類から由来したわけではなく、これが胸びれ、腹びれの先祖だというわけにはいかない。

それはともかく、胸びれと腹びれは、独立し、巧みに動かせるようになってはじめて、さまざまな使い方ができるのであって、このような動かさない単なる“つい立て”では、せいぜい体の回転防止くらいにしか役立たない。そこで欠甲類は、スマーナ形に似合わず、きこちない泳ぎしかできなかつたであろう、ということになる。それでも彼らは大いに繁栄した。他に競争者がいな

いということの良いことである。しかし、体はずっと10センチ前後にとどまり、大きくなったものはいなかった。競争原理が働かないと大きくはなれないのである。でも、大きくなったとて仕方がないではないか。欠甲類はみんな仲良く小さいままで、シルリアからデボンにかけておよそ1億年の間、平和に暮していた。

次は翼甲目である。頭甲類は底生で欠甲類は遊泳性と、その体の形からうまく説明できた。ところが、翼甲類にいたって、その形から生活を類推する方法は、早くも破綻してしまう。翼甲類は頭甲類よりも大きな甲を頭にかぶっている。腹面は平らで口は下側についている。まぎれもなく底性の特徴である。ところが、目は頭の上ではなく両側についており、尻尾は上に曲ったワイ尾ではなく下へ曲った逆ワイ尾であって、これらはさっき、遊泳性の特徴だと言ったばかりである。底生性と遊泳性の特徴を合わせ持つ翼甲類は、さてどんな生活をしていただろうか？

この程度の難問にへきえきするようでは、学者の素質はない。次のように考えればよろしい。翼甲類は水底で、頭甲類と同じように泥を吸いこんで餌をこしわけ食べた。しかし、移動する時は水底をのろのろはっていた頭甲類とちがって、さっそうと水中へ泳ぎ出したのである。ほんとかいな。

よくわからぬ腔リン目をのぞき、無ガク綱の3グループは、かくして、純底生性の頭甲類、純遊泳性の欠甲類、それに、底生と遊泳の両方にまたがる翼甲類の3つに分かれ、それぞれたくさんの種をつくり出して大いに繁栄した。このように、さまざまな住み場所へ、その場所で暮らしやすいような形に自分の体を変えて、住みついていくことを、「適応放散」という。この言葉は、有名なアメリカの古生物学者オズボーンがつくった。彼がオーストラリアへ行ったとき、そこに、当然のことながら有袋類がたくさんいた。有袋類は、ふつうのケモノである真獣類（有胎盤類ともいう）とは、同じ哺乳類ではあるが全く系統のちがうグループである。しかるに、オズボーンの目にうつった有袋類は、どれもこれも、真獣類のどれかに大変よく似ていた。オオカミそっくりなタスマニアウルフ、前足がスコップになり目も退化しているフクロモグラ、前足と後足の間に皮膚を張ったフクロモモンガなどなど。系統はちがっても、同じような生活場所で同じような暮らしをすると、同じような形になる。これが適応である。そして、どの地域でも、だいたい似たような生活場所がたくさんあって、そのそれぞれにはいろいろこむことによって、たくさんの種が生じる。これが放散である。こうして、1つのグループにたくさんの種が生じ、系統がちがってもよく似た形のものできる。せきつい動物の歴史は、この適応放散の終りなきくり返しみたいなもので、これからいやになるほどその話をするつもりだが、無ガク類の底生、遊泳、兼用の分化は、その適応放散の最初という栄華をになっている。

もっとも、適応放散という言葉をつくったのはオズボーンだが、生物がさまざまな住み場所へ、形を変えて適応し、場所の数だけたくさんの種に分かれていくことを、初めて指摘したのは、

かのダーウィンである。ビーグル号で5年かかって世界一周している間に、一生つづく慢性の持病といっしょに、これも一生つづく精神の疾病、進化論を思いついたダーウィンは、イギリスへ帰ってから、生物は神様ぬきでいかに進化することができたかを考えつけた。自然にはたくさん生物(種)がいっしょに住んでいて、お互いに食ったり食われたり、競争したり助け合ったりしている。そして、すべての種は、成育できるよりはるかに多くの卵や子供を生む。ほかのものよりほんのちょっとでも首が長いとか足が早いとか、すぐれた性質を持って生まれた個体は生き残り、そうでない個体は成熟するまでに命を落して子孫を残さない。この過程を「生存競争」といい、よりすぐれたものが子孫を増やしていくというその結果を「自然選択」という。

というように、たいていの本には書いてある。しかし、首が長いとか足が早いとかいう性質は、ほんとうに「すぐれている」性質なのだろうか？ キリンの国ならより首の長い奴がすぐれているのかも知れない。人間の世界では、しかし、あまり短かいのより少し長目の方がかっこうはよいが、長くなりすぎるとロクロ首といってお化けとなる。首の長いブタなど、想像するだにおぞましい。足の速いオオカミはたしかに有利だろう。でも快足のパンダやナマケモノが、より生き残りやすいとは少々考えられない。むしろ、ナマケモノにとっては、動かない能力こそが生き残りの秘訣なのである。

生物は種ごとに、その種特有の生活場所と生活の仕方をもっている。その場所、その生活にとって少しでも有利なもの、というのが、「すぐれた」性質の意味であって、すべての種にとってすぐれた性質というわけではない。キリンにとってすぐれた性質はブタにとっては困った性質となり、オオカミとナマケモノとは足の速さで利害が対立する。

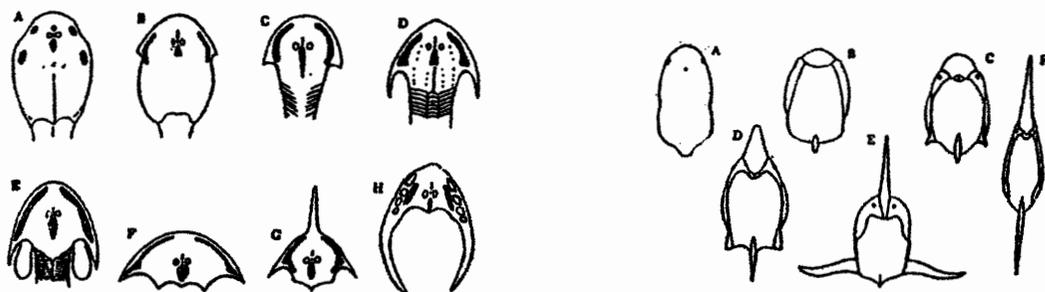
ある場所、ある生活にとって都合のよい性質を獲得することを「適応」という。そのためには、身体の一部もしくは全部を変形しなければならない。馬は空を飛ぶために前足を翼に変えた。よりよく飛ぶためには、体にくらべて翼を大きく長くしなければならない。ワタリアホウドリは繁殖期以外、一生海の上を飛行してすごす。といっても、飛び続けているわけではない。時には海へ舞い降りて何か食べなければ飢えてしまう。いらぬことを書くから、文章のつながりが切れて難読するが、ともかく最高の飛行技術の保持者ワタリアホウドリは、さして大きくない体に翼開長3.9メートルという、現生の飛行せきつい動物中最大の翼をつけているのである。もっとも、中生代の空には翼開長8メートルに達したプテラノドンが飛んでいた。最近見つかった翼龍ケツアルコアトルは10メートルの翼を持っていたという。飛行性のハ虫類、翼龍については、ずっとのちにまた詳しく述べる予定だが、彼らは果して飛ぶことができたかどうかさえ疑問われているほど不細工な飛行者であって、翼を大きくさえすればうまく飛べるとは限らないのだが、かといって、ペンギンの翼では飛べるものではない。ともかくアホウドリは翼を長大にし、空ではだれも及ばない飛行の達人となった。ところが、繁殖のためには地上に降りなければならない。

地上ではその長大な翼は文字通り無用の長物となり、いやそれどころか重すぎて歩行のじゃまになり、彼らと彼女らはよたよたとしか歩けない。ホ乳類というものは、人間も含めて、どういうわけかトリ類がその卵とともに大好きだから、オオカミやキツネのいるところなら、アホウドリはあっという間にすべて食われてしまったにちがいない。そこで彼および彼女は、ホ乳類の全くいない絶海の孤島を繁殖場を選んでゐる。ところが、人間なる超ホ乳類がやってきて、コン棒一本で当るを幸い打ち殺し、多くのアホウドリが絶滅寸前まで追いつめられた。棒を持って近づいても逃げようとしないので、アホウドリという不名誉な名前をもらっているが、まあ馬だからそんなに賢くはないけれど、鳥並みの脳は持っているから、特別にアホウというわけではない。大空への適応のしすぎて、地上では活発に動けなくなっているだけである。

何の話をしているのかよくわからなくなってきたけれども、適応という現象は、ある特殊な生活へ特殊化していくことで、一般的にすぐれた生き物になることではないということを書いたかったらしい。つまり、ダーウインの生存競争・自然選択は、生物を特殊化させていただけなのである。これを「進化」と呼んでもよろしいか、などと言い出すと、ダーウインの進化論が成り立たなくなってしまうので、生物学者たるものは口が裂けても言ってはいけないことになっている。<口が裂けたら痛くて言えませんよ ー3局長><変な所へ出てきてつまらぬことを言っていないで、おとなしくショウユでもつくってろ。そういえば、ショウユを送る送るといってながら、まだ送ってこんなやないか ー 会長>

さて、甲皮魚類は、せきつい動物はじめての適応放散を行なった。底生・遊泳・兼用の3型でそれぞれの生活ぶりは、それぞれの形態に見事に現われている。甲皮魚類がこの3種しかいなかったら、話は万事めでたく終るのだけれども、実はそうはいかない。底生となった頭甲類がまた、何十、何百もの種にわかれていくのである。もちろん、水底にもさまざまな場所がある。泥底、砂底もあれば、砂利のところや岩が露出しているところもある。水もよどんだり流れたりしている。それぞれのちがった条件に適応させれば、5つや8つの特殊化はすぐ説明できるのだが、実際の生き物はたいへい、人間の考えを上回って分化してしまうものなのである。

次ページの図を見ていただきたい。これは、頭甲類の頭甲のいろいろであって、この頭甲の形を、それぞれどんな生活条件に適応していたのか、説明できる人はいまい。まあ、人間にもさまざまな人がいるから、絶対だれにも説明できないとはいえないが、少なくとも私は説明を拒否する。ついでに、翼甲類の頭甲のいろいろも図にしておこう。いずれもこれはごく一部であって、実際にはもっとさまざまな頭甲が見つかっている。合理主義万能の世の中だが、生物の世界はすべてが合理的に説明できるものではない。では、生物学とは不合理な学問か？ときかれましたら困るが、まだまだわけのわからんことがたくさんあるということである。だから、生物学者はあまりえらそうなことを言ってはいけない。せいぜい、私くらいにとどめておかねばならない。



ROMER : Vertebrate Paleontology より

頭甲のいろいろ

頭甲類

鱗甲類

初めてのせきつい動物、アゴのない魚、甲皮魚類は、オールドウ"イス、シルル、テウ"オンの3紀、実に1億5000万年にわたって、池や河の中で活躍した。ところが、テウ"オン紀が終るころ、彼らはだんだん少なくなり、遂にいなくなってしまう。それは、シルル紀の終りごろに出現したアゴのある魚によって滅ぼされたのだということになっている。初めてアゴをつくった魚を板皮魚類という。アゴは持ったが、どうひいきめに見ても板皮魚類はスマートな魚とはいえず、魚としては落第生ではあったが、それでもアゴの力は偉大で、せいぜい30センチにしかなれなかった甲皮魚類に対して、板皮魚類の中には実に全長10メートルに達した怪物も現われている。こうなれば、河口で待ちうけていたユーリプテリッド、すなわちオオサソリも恐くはなく、逆に餌として海へも進出していく。テウ"オン紀がはじまると、さらに進歩した魚のグループが加わる。その1つは、サメとエイの軟骨魚類であり、もう1つはふつうの魚硬骨魚類である。両者とも、水中の遊泳生活に適した洗練された形をもち、現在にいたるまで水界の支配を続けているグループである。

こんなのが出てくれば、アゴもなく泳ぎも下手な甲皮魚類が生きのびていくすべはない。こうして最初のせきつい動物は、その役目を終って消えていくのである。

ところで、テウ"オン紀は5000万年続いた。軟骨魚類と硬骨魚類が出現したのがこの紀の初めてであり、甲皮魚類が減じたのはこの紀の終りである。今から5000万年前といえば、ウマの先

祖がまだヒツジくらいの大きさで森の中を走りまわっていたころであり、ようやくヒトらしくなったアウストラロピテクスが現われるのは、たった2～300万年前のことである。このたよりない甲皮魚類が、アゴとキバを備えた凶悪な魚にとりかこまれながら、かくも長い間生き残ってきたのはなぜか？ これは、だれも説明したことのない難問であり、それどころか、だれも質問したことのない問題である。私は、質問することは好きだが答えることはきらいなので、もちろん解答は持っていない。でも、生物界でも人間界でも、優れたものは必ず勝ち劣ったものは必ず負ける、という神話が横行している現在、甲皮魚類がなぜ5000万年もの間生き残ることができたのか、ちょっと考えてみるのも面白かろう。同じような例は、今後のせきつい動物の歴史の中でくり返し現われる。またその都度、しつこく指摘することにしよう。

反 原 発

— 汚染食品を食べて ガンになりたくない —

松 永 明 美

先日、広瀬 隆 氏の講演を聴きました。今まで他人事のように考えていた「核」というものが、私達の生活全体をどんなに脅かしているか、知ることができました。もう遅いかもかもしれません。だけど、だからと言って、反対しなければ、さらに今以上に、政治家は何をするかわかりません。私達、国民をモルモットにして ——。

円高差益といって、輸入食品の並ぶデパート。汚染食品が、ほとんど棄てられていない事実。一番売りやすい国、日本。知らず知らずのうちに、汚染食品が食卓にのほっています。工業製品を売り続けてきた“付け”が、こんな形で回ってきたとしたら、余りにも大きすぎる“付け”ではないでしょうか。遺伝子さえ、組みかえてしまう放射能を持った食品を、どんどん食べなくてはならないのだから。この上、ガット自由化で食品がどんどん安く入ってくることになれば、どうなるだろう。日本は汚染食品の宝庫と化してしまう。日本における食料自給率は、エネルギー換算でたった30%です。余所から食べ物を買わなければならない現在、飢えることが恐ろしいければ、毒入りでも買う以外ないのですか。

日本では、輸入食品の放射能基準を、370ベクレル以内と決めているが、その基準もあいまいです。放射能は微量でも危いのだから、370という数値は、あくまで国が決めた、「我慢値」です。シンガポールは、いかなる放射能も許してはいません。今すぐ、厚生省は、輸入食品の放射能量を、国民に知らせる義務があります。

放射能を浴びた食品を食べ続けたら、私達の子供に、どんな障害が生まれるのか、考えても恐ろしいことです。人間は愛し合い、二人の子供を育てていきたいと、自然に思うものです。それなのに、子供を産むことさえ、出来ない世の中をつくっていかうとしています。本当に私達が求める「幸せ」は何なのでしょう。

まだ、こりずに、能登原発をつくる神経を疑います。電力は余り、原子力発電のコストは決して安くなく、廃棄物の処理を考えてもその方法も見つからず、世界各地で反対、建設凍結と、脱原発の道を歩んでいる今、何故、チェルノブイリ以後、初めて原発をつくらなければならないんでしょう。さらに恐ろしいことに、能登原発は、炉心からたった200mのところ、県道が走るという設計です。一日4千台という観光バスや車が通るといふ道です。このような原発は、きいたこともありません。

原子力に代わるエネルギーはあるはずで、一番大きな太陽エネルギー。風力、波力、地熱といった自然のもの。植物や排棄物さえもがエネルギーを出しています。科学者の知恵を集めれば、いくらかでも安全エネルギー開発は出来ると思います。＜原発はつくれても安全エネルギーはつukれないのが“科学者”というもので、あまり期待しない方がよい — 会長＞ 原爆の原料となるプルトニウムをどんどんつくってしまう原発。日本もいつかは、戦争しようという訳かもしれません。そんな愚かな道は歩みたくありません。

まだ間に合うと思います。そして、一基つつでも原発を止めていきましょう。今すぐ、原発についての正しい知識を得ていきましょう。原子力の火を止める為には、私達の生活面でも、変化が必要かも知れません。なるべく自分の体をつかって、むだなエネルギーをつかわないように気をつけたいと思います。原発は、政治家や経済界と密着しています。政治・経済すべての面からの根本的改革が必要だということもわかります。それなら、今、国民に広く意見を聞き、これからの日本のとるべき道を決めようではありませんか。本当の「幸せ」を求めて……。

私も勉強し始めたところです。知れば知るほどに賛成できません。今、知ったことを、一人でも多くの人に語っていこうと思います。

ねずみとり戦記

栗間 修平

本論文は、私の約10年にわたるそして現在も継続中である苦闘と実践の記録である。その苦闘と実践は、恐らく今後も引き続き繰り返されるであろう。従って、本論文はその苦闘と実践の中間総括である。

“ねずみとり”なる言葉から、警察官を組織的に動員して車やバイクの運転者に対して陰険なやり口で行なわれるあの“ねずみとり”を連想される方も多いと思う。恐らく、我が日本生物学会の会員の中にもあの“ねずみとり”に引っ掛かって幾許かの金をまきあげられた運の悪い「被害者」も何人かはいると思う。仄聞するところによれば、あの“ねずみとり”は警察署及び警察官の点数稼ぎの為に行なわれるものであるらしい。交通違反を予防することによって交通事故を未然に防ぐのと交通違反を摘発することによって事故を防ぐのとは、結果は似ているようだがその中身は全く違う。警察にとってみれば、交通違反を予防しても何の得にもならない。一方、交通違反を摘発すれば、それは点数にもなれば具体的な収入にもなる。勢い、警察は交通違反の予防という観点を捨て、違反の摘発に精力的になる。交通違反の摘発に重点を置けば、ドライバーが違反を犯してくれること位喜ばしいことはない。何しろ、そいつを捕まえればそれで点になるのだから……。どんなドライバーであっても何らかの交通違反は犯している筈である。それを、偶然の出会い頭に捕まえるより、組織的に網を張って捕まえた方が効率がいいに決まっている。その網を張るやり方の一つが、“ねずみとり”であると言える。そんな警察の網に引っ掛からないように、皆さん、安全運転に気を付けましょう。安全運転というのは、事故を起こさないことは言うに及ばず、警察に捕まらないこともそうなのです。

ところで、私が本稿で論じようとする“ねずみとり”は、そのボリ公による“ねずみとり”の話ではない。所謂鼠色をした、四本足でチョロチョロ走りまわる、尻尾の長い、あのネズミを捕まえる話である。

私が現在住んでいる家に引っ越して来たのは約10年前である。場所は東京の下町、家の造りは古いしもた屋風。軒低く貧しげな家ではあるが、樋口一葉の小説

にでも出てきそうな下町情緒溢れる風情の家である。初めて我が家を訪れた友人達が我が家の趣きある造りを眼にして洩らす感想の中で圧倒的に多いのが、「面白い」であり「生活が滲み出てますね」である。私の生活はどちらかと言えば貧乏な部類に属すかもしれないが、だからといって、軒低く貧しげな我が家を見て「生活が滲み出てますね」などと言うことはないじゃないか。ましてや、それを「面白い」と言って笑うなどもってのほかだ。時にはそんなふうに反発したくなることもあるが、改めて我が家を見回してみると、他人が「面白い」と言って笑うのもむべなるかなという感じもする。

引っ越して来たその夜から、我が家の天井裏をゴソゴソとネズミが走りまわっているのに、私は気付いた。寝ている間に顔に小便でもひっかけられたら嫌だとは思ったが、天井裏にネズミがいるということは私にはそんなに気になることではなかった。いやむしろ、「ガサガサガサ」というネズミの走りまわる音には私は何か懐かしいものすら感じた。

私の郷里の実家の天井裏でも同じような音をたててネズミが走りまわっていた。そのネズミを捕る為にイタチが我が家に入り込み、大騒ぎをしたこともある。そんな昔の思い出がふつふつと湧き起こり、私は懐かしい音を聴く思いで天井裏のネズミの足音を聴いていた。

私が引っ越して来た家には、裏に奥行半間ほどの土間がある。その土間の上をネズミが駆け抜けていくのも目撃した。土間を駆け抜けていくネズミの姿を見ても、私はさほど気にも止めなかった。懐かしい者の姿を目にしたとは思わなかったが……。天井裏にネズミがいるのだから、床下にネズミがいてもおかしくはない。そもそもネズミの出そうな家である。天井裏や床下をネズミが徘徊してるからといって、ガタガタ騒ぐこともあるまい。当初、私はそんな鷹揚な気持ちでいた。

ある日、その鷹揚な私の気持ちがコロッと変わった。その日の朝、出勤しようとして玄関で靴を履いている時、台所の方で妙な音がした。靴を脱ぎ捨て、台所へ行こうとしたら、台所からネズミが逃げて行った。

「野郎、いい気になるな！」

私は思わず怒鳴り声を上げそうになった。すぐにでもそのネズミを追い詰めて捕獲したかったのだが、出勤前の慌ただしい時間である。とりあえずは、土間と台所の間にある戸を閉め、そのまま出勤した。私は昔から“帝国主義”というのが嫌いで、それで知らぬが“定刻主義”というのにも馴染めない。出勤前にネズミ捕りに夢中になっていたら、ただでさえ定刻に職場に着けないのに、それに輪をかけてしまう。私の少々の遅刻には鷹揚な職場の空気がコロッと変わるのは因

る。我が“反定刻主義”も程々にしておかねばならない。

その日、仕事を終えて帰宅した私は、台所を仔細に点検してみた。米の入っている袋が食いちぎられていた。その時、私はネズミに対する鷹揚な態度を捨てた。我が家に入り込むネズミはもはや容認しない、何年かかろうと徹底的にセンメツし抜く、という決意を私はその時強固に打ち固めたのである。

ところで、ネズミはどこから台所へ侵入したのだろうか？その日の朝は、台所と裏の土間との間にある戸が開いていた。恐らくそこから侵入したであろう。もしそこだけがネズミの侵入路であるならば、ネズミを台所から締め出すのは簡単である。その戸を閉めてさえおけばいい。しかし他にも侵入路があれば、戸を閉めておいてもネズミにとっては痛くも痒くもない。私は再度仔細に台所を点検した。床下からガス管が通っている。そのガス管を通す為に床に穴が開けてある。その穴の真ん中をガス管が通っているが、その穴の隙間はネズミが出入りするには十分な大きさである。私はその穴をガムテープでふさいだ。ガムテープでは心許ないかなとその時思ったけど、意外にもガムテープは偉大な力を発揮した。そのガムテープの壁を食い破り、突破して台所へ侵入して来たネズミは皆無である。そしてその時のガムテープの壁は今なお健在である。ガス管の周囲の穴をガムテープでふさいだ私は、これでネズミの台所への侵入路を断ったと思った。何故か知らぬが、その時私は床下のネズミのことだけ考え、天井裏のネズミのことを忘れていた。台所の壁や天井にもネズミが出入り出来る隙間や穴が幾つかあった。迂闊なことに、私はその隙間や穴を見落していた。ずっと後になって、その隙間や穴からネズミが台所に侵入して来るようになる。その話は後にまわそう。

ネズミの台所への侵入路を断つ一方、私はネズミに対する捕獲・センメツ作戦を開始した。その為には、まずネズミ捕りの道具が必要である。ネズミ捕りの道具としてまず思い浮べれるものが、私の場合2種類あった。一つは、カゴの中に餌を吊しておき、ネズミが餌に食いつくとカゴの扉が閉まるという仕掛けになった物である。もう一つは、木の板にバネが仕掛けてあり、ネズミが餌に食いつくとバネが弾けてネズミを挟んでしまうという物である。カゴの場合、捕獲されたネズミは生きており、それを殺すという手間がかかる。ガキの頃、カゴの中に捕獲したネズミをドブ川の水に漬けて溺死させた記憶もある。あまり綺麗な思い出ではない。板の場合、針金で作ったバネに挟まれたネズミは即死するか、即死しないまでも挟まれている間に絶命する。ちなみに、ずっと前に『ビッグ・コミック』か何かで見たけど、この板のネズミ捕りは新潟県三条市で作られているそうだ。今我が家にある板のネズミ捕りにも「SANJO OHTRA」というレツテルが貼ってある。カゴのネズミ捕りは関西方面で作られているらしい。

私は雑貨屋へ行き、板のネズミ捕りを買って求めた。店のオヤジは店の片隅の、しかもいろいろな品物の下の方から私が求めようとするネズミ捕りの板を引っ張り出した。私は、ネズミ捕りの板があまりにも存在感の無い場所に置かれているような気がしたので、

「こんなものを使う人、もう滅多にいないのか？」と聞いた。

「いや、食品を扱っている店なんかは、薬を使うのを嫌って専らこれを使ってるようですよ。」とそのオヤジは答えた。最近では、昔ながらの板やカゴのネズミ捕り以外に、ネズミを粘着面にくっつけてしまうネズミ捕りも出回っている。その類のネズミ捕りは雑貨屋ではなく、薬屋で売られている。私は薬屋へ足を運び、粘着型のネズミ捕りも購入した。その時私が買い求めたのは、「ゴキブリ・ホイホイ」を大きくしたようなやつで、確か「ネズミ・ホイホイ」とかいう名が付いていた。パネ仕掛けの板と粘着型の両方を使ってみて、効率のいい方でもってこれからのネズミセンメツ戦を闘い抜こうという算段を私はしていた。

私は早速、板と「ホイホイ」を裏の土間に仕掛けた。最初にネズミがかかったのは「ホイホイ」の方だった。しかし、ちょっと困った問題が発生した。「ホイホイ」にくっついて身動き出来なくなったネズミは生きている。動けないネズミは何時間かすれば死ぬのだが、その間そのネズミはもがくだけもがきガサガサ・キーキーうるさくでならない。しかも、死んでくれないことには、私はそのネズミを始末することも出来ない。「死ぬまで待とうドブネズミ」という悠長な心境には、私はなることが出来ない。その「ホイホイ」にかかったネズミがはかない足掻きを示している間に、パネ仕掛けの板にもネズミがかかった。そのネズミはほぼ即死の状態だった。それなら処分もしやすい。私は、昔からある板製のネズミ捕りを断固として採用することに決めた。

この新潟県は三条市で作られている板製のネズミ捕り。10年前には幾らしていたのかももう忘れたけれど、近所の雑貨屋で今は一枚380円で売られている。私が最初にこの板を買って来た時、ある友人が

「これは使い捨てだぞ。一枚や二枚買ったって、そんなものじゃ、お前の所では間に合わんだろう」と言った。確かに、一枚で1匹のネズミしか捕れないのなら、一枚や二枚では我が家では間に合わない。彼によれば、一度死んだネズミの匂いの付いた板には別のネズミは決して寄り付かない、ましてや1匹目が血を流したりしたら、その板は絶対に使いものにならない、その位ネズミは賢い生物だ、とのことである。最初の4～5匹を捕るまでは、私も彼の言うことを信じていた。1匹捕る度に、私は板に挟まれたネズミを板毎紙袋に入れてゴミと一緒に捨てていた。そんなことをしていると、ネズミ1匹捕る度に幾許かの金を払ってネズミ

捕りの板を新しく買い求めなければならない。「えらく金がかかるな」と私は思った。私の対ネズミ戦に要する「軍事費」が私の月収の1%を超えることになれば、私は国家の防衛費の1%枠突破という事態にもつべこべ言えなくなりそうな気がする。そんなことになると居心地が悪い。

私は使用済みの板を再使用してみることにした。しかし、使用済みの板を再使用するには、板に挟まったネズミを板から取り外さなければならない。ネズミを素手で持つなどということは、気の小さい綺麗好きな私に出来ることではない。私は思案の挙げ句、手にビニール袋をかぶせ、その手になるべくネズミに触れないようにバネを起こしてネズミを紙袋の中に落とすというやり方をとることにした。死んだネズミを板から取り外すのはうまくいったけど、さて、その使用済みの板にもう一度ネズミがかかってくれるかどうか？だが、仕掛けてみると、案ずるより産むが易し。使用済みの板であっても、ネズミは引っ掛かった。少々血の付いた板であっても、ネズミがそれに寄り付かないなどということはなかった。一枚の板で10匹近くは捕まえることが出来る。ただ、繰り返しネズミを挟み続けてきた「歴戦」の板は、だんだんバネが弱まっていく。折角ネズミを捕えながらも、バネが弱くなっている為に逃げられたことも何度かある。

これは板が新品でも起こることだが、大きなネズミが引っ掛かった場合、そのネズミが板から外れてしまうことがよくある。ある朝、起きてみたらネズミ捕りの板が引っ繰り返っていた。だが、そこにネズミは挟まれていない。「逃げられたかな」と思いあたりを見回してみたら、土間の隅に大きなネズミがうずくまっていた。その姿は息も絶え絶えという様子だった。放っておいてもそこで死ぬだろう、こいつの始末は帰ってからだと考え、私はそのまま出勤した。さて、帰宅してそいつの始末をつけようとしたら、そのネズミはもうどこかへ消えてしまっていた。板に挟まれた時、首の骨でも折ればそのネズミは即死する。即死しなくても、板に挟まれたままであれば、大体首や胸や頭が針金によって締め付けられているから、ほんの数分でそのネズミは絶命する。だが、板から外れた場合には、針金のバネで叩き付けられて脳震盪をおこしたりどこかの骨を折っただりしてその場では息も絶え絶えであっても、時間が経てばネズミはどこかへ逃げてしまう。息も絶え絶えのネズミを見付けたら、その場で殺すのが鉄則である。かの魯迅も言っているではないか、「水に落ちた犬は打て！」と。ネズミ捕りに叩き付けられたネズミは殺せ！

私は、その時ネズミに逃げられたことを教訓化し、それ以来、板から外れて弱っているネズミを見付けたらその場で殺すことにした。その為に角材一本を用意し、裏の土間の所に置いている。最初は先を尖らせた鉄パイプを置いておこうかと考えたが、その筋から痛くもない腹を探られたりされたくないの、角材で我

慢することにした。

私のネズミ捕り作戦は赫々たる戦果をあげていった。だが、私にも油断があった。ある日、また台所にネズミが侵入した。以前ネズミに食い荒らされて以来、米や麦は少し大きな缶の中に入れておくようにしていたのだが、今度は煮干しの入った袋が荒らされた。私はネズミの出入口になりそうな所を点検してみた。何の異状も無かった。では、ネズミはどこから侵入して来たのか？私は台所を見回した。天井に隙間があり、壁に穴が開いている。そこに隙間や穴のあることはわかっていたが、それまで私は気にも止めないでいた。もしかしたらそこがネズミの出入口になっているのではないか？私はその隙間や穴をガムテープでふさいだ。ガムテープが意外な威力を発揮することを、既に経験知として私は知っていた。その隙間や穴をふさいでからは、ネズミの台所への侵入は途絶えた。

その間にも、裏の土間に仕掛けたネズミ捕りには時々ネズミがかかった。私は捕れたネズミの数を勘定する為に、裏の土間にある棚の脇に「正」の字を書いている。私の捕ったネズミが間もなく100匹という頃になって、天皇の様子がおかしくなった。私が100匹目のネズミを殺すのが先か、それとも昭和が終るのが先か？私は天皇が病気だからといってネズミ捕りを自粛したりはしない。結局、昭和は現時点(12月5日)まで人の血を吸いながらしぶとく続き、その間に私は100匹目のネズミを捕えた。

これまでの私の対ネズミ戦争は、私が多少の出費を強いられ、多少の被害を受けたとはいえ、私に凱歌が挙がっていたと思う。だが、つい最近になって様相が変化した。

ある深夜、居間の方からガサガサという音が聞こえて私は目が覚めた。我が軒低く貧しげなる家の構造を少し説明しておこう。玄関を入ると半間ほどの幅の土間がある。そこは自転車置場兼物置兼靴脱ぎ場である。そこで靴を脱ぐと、すぐに部屋がある。その部屋には机や本やこたつやその他雑多な物が置いてある。壁には、掛軸も掛かっておれば、額縁も飾られている。そこが居間である。その居間の奥に部屋があり、その部屋に押入が付いている。その部屋には、常日頃から布団が敷かれてあって寝室になっている。その寝室の奥が台所で、台所の脇に便所がある。台所の奥は私がネズミを捕り続けてきた土間である。その土間には洗濯機やネズミ捕りや角材が置いてある。その土間は物干し場にもなっている。その向うは裏の家とを隔てる壁である。玄関の戸を開け放ち、家中の戸を開ければ、裏の壁まで真直ぐに見通すことが出来る。極めて風通しのいい家である。何年前の裏の家の火事の時には、消防のホースが我が家の玄関から居間・寝室・台所

を通り、裏の壁を破って火災現場まで延びていった。

さて、ネズミに話を戻そう。これまでネズミは台所に出没することはあっても、居間の方に姿を現したことは無かった。そもそも、居間には食物になりそうな物はほとんど置いてない筈である。私はガサガサという音が気になり、寝室の電気を点け居間を覗いて見た。そしたら、何やら黒っぽいものが玄関の側の土間へと逃げて行った。私はネズミが出たことを直感した。居間の電気を点けてみると、朝食用のパンが居間に置いてあり、それがかじられていた。時は深夜である。私はとりあえずそのパンを片付け、眠ることにした。ところがそのネズミはしつこくて、私がパンを片付けた後もまた居間に現れた。ガサガサという音がする度に私は目が覚め、電気を点ける。その度にネズミは逃げて行く。デリケートな神経を持つ私はその夜ほとんど眠ることが出来なかった。「ネズミとの攻防に疲れて死んでも労災の申請は出来ないな」などと思いながら、眠れぬ夜を過ごした。

翌日、仕事から帰った私は玄関側の土間を点検した。壁に隙間が出来ていた。その隙間は壁板がずれて出来たものだった。その隙間はガムテープでは間に合いそうにない。私は板を打ち付けてその隙間をふさいだ。これで万全と思ったけれど、念には念を入れるに越したことはない。私は居間も寝室も点検してみた。そしたら、押入の天井の隅にポツカリと穴が開いているのが見つかった。それは明らかにネズミによって開けられた穴だった。私はその穴を苦勞してふさいだ。

居間や寝室を仔細に点検している時、私はある物がなくなっていることに気付いた。そのある物とは、蚕の繭玉で作ったネズミの置物である。それを本立ての脇に置いておいたのに、見当らない。何かの拍子に下にでも転がり落ちたのかと思い、本立ての下を捜したけど、見つからなかった。何とそれは、その2～3日後に、半分ネズミに食われた無残な姿で台所の隅から出て来た。ウソみたいな話だが、ネズミがネズミの置物を食ってしまった。

ネズミの室内への侵入路を封じたつもりになった私は、その夜から安眠出来るものと思っていた。確かに二晩か三晩はネズミの侵入の心配もなく安心して眠りに就くことが出来た。だが、そんな私を嘲笑うかの様に、またネズミが台所に侵入して来た。

我が家の裏の戸は極めて立て付けが悪い。無論、アルミ・サッシなどという気の利いたものではなく、昔ながらの木の戸である。気を付ければピッシリと閉まるのだが、普段の生活の中では私はそこまで気を配ったりしない。どんな状態であっても、戸が閉まってさえいればいいと私は思っていた。その夜、その戸は少し斜めになり、戸の下部と柱の間にわずかな隙間が出来ていた。そのわずかな隙間からは、いかにネズミといえど出入り出来る筈がない。ところがネズミは、その戸の下部をかじりそのわずかな隙間をおし広げて台所に侵入して来た。相手は

私が考えていたよりもはるかにしたたかであった。私は戦慄し、どうしてもそのネズミを仕留めてやろうと心に誓った。

私は板製のネズミ捕りを増強して裏の土間に仕掛けるとともに、台所にもネズミ捕りを置いた。台所に仕掛けたネズミ捕りは、薬屋で購入した粘着型の物である。その名は「ねずみ捕物帖」。値段は890円か980円だった。当初、使い慣れた板製のネズミ捕りを台所にも仕掛けようと考えたが、板のネズミ捕りの場合、捕れたネズミが血を流すことがある。台所がネズミの血で汚れたら、後が面倒だ。そこで、少々値は張るけど「ねずみ捕物帖」を仕掛けることにした。そしてその夜、その「ねずみ捕物帖」に見事にネズミがかかった。

その夜は、前夜のネズミの侵入を教訓化し、私は立て付けの悪い裏の戸をピッシリと閉めておいた。にもかかわらず、ネズミは台所に侵入して来た。一体どこから入って来たのか？調べてみたら、今度は便所の壁に穴が開けられていた。一つの穴をふさぐと、別の所にネズミは穴を開ける。その穴をふさぐ。そのうち我が家は、ネズミの開けた穴とそれをふさいだ板やガム・テープでデコボコになりそうだ。それでも、そのネズミを退治してからは、現在まで、ネズミが室内へ侵入して来た形跡はない。だが、未だ我が家の天井裏にはネズミがいるらしい。時々ゴソゴソというネズミの足音が聞こえる。

最近、地上げの波が私の住む下町にも押し寄せて来ている。行政サイドからも“川の手再開発”などという愚にもつかぬものが打ち出され、地上げに拍車をかけている。古い民家を取り壊され、そこにビルやマンションが建てられる。空き地のままになっている所もある。取り壊された古い民家に居着いていたネズミはどこへ移ったのか？最近、我が家に限らず、我が家の近所の家では頻繁にネズミが出るようになったらしい。つい最近私がネズミ捕りの板を買いに行った時、雑貨屋のオヤジが

「お宅もネズミが出るの？どこもネズミが出るらしく、最近、これを買いに来る人が増えたよ。」と言っていた。また、私の隣の家のオヤジも

「近頃、ウチはネズミがよく出るけど、お宅はどう？」と言っていた。

最近のネズミの頻繁な出没は、恐らく地上げ一再開発によって引き起こされたものであるだろう。これまで巢食っていた古い家を取り壊され、居場所を失ったネズミが近所の民家に移って行った。その結果、我が家にもネズミが侵入し、あちこちを荒らして平穏な生活を脅かすことになった。地上げなどというものは庶民をないがしろにしたものであるが、ないがしろにされた庶民はその地上げの陰で、侵入して来るネズミとも関わなければならない。家に出没するネズミを殺しても、地上げや再開発の波を押し止めることは出来ないにもかかわらず、とにかく

くネズミを捕らねばならない。家に入り込んだネズミを退治しないことには、安心して眠ることも出来ない。そうこうしている間にも、地上げや再開発が進んでいく。そしてまた別の所からネズミがやって来る。今度はそれを追いまわす。このイタチごっこならぬネズミごっこは、今の世の中の何かを暗示しているような気もする。

私は我が家に出没するネズミが憎らしい。人の家に土足で入り込み、人の目を掠めて食物を漁って逃げる。果ては安眠妨害さえしでかす。こんな輩を許す気にはなれない。約10年前、我が家に初めてネズミ捕りを仕掛けた時に誓った通り、徹底的にセンメツするまで私はネズミを殺し続けるつもりだ。あの時の決意は今も変わらない。だが、国会議事堂や霞が関や大企業の本社にはもっと質の悪いネズミが巢食っているようだ。でかい面をし、でかい態度をとり、それで人々の目を掠めて札束と利権を漁る。それが見つかって、追求されても、あれこれ言い繕って人々をだますことなどわけないと考えている。こんな輩こそ、本当に許してはならないだろう。しかし、人の目を掠めて何かを漁る姿が似ているからといって、こんな輩をネズミの同類だと言うと、我が家のネズミが怒るかもしれない。最近の我が家のネズミは攻撃的である。怒ったら、どんな攻撃を仕掛けてくるかわからない。私も覚悟を決めて闘い抜かねばならないだろう。

【 完 】

K 氏のケチについて(序)

日本霊長類学会の初代会長にして(財)日本モンキーセンター所長、元京大教授の K 氏の、徹底したケチぶりについてのレポートである。なお、これは序論であるから、ここで紹介する事実もまだ序の口ということになる。

K 氏には「ニホンサル^{ニホンザル}の生態」という著作があるが、その河出書房新社・1969年版を材料にして、K 氏のケチぶりを見てみよう。

同書に「K 氏のケチぶりが衰えている件については、日本生物学会会員の H. K 氏(こちの K 氏は断じて河合雅雄氏ではない)に教示を受けたことをここに記しておく。

前掲書の6ページを開くと、日本地図に全国の野猿公園がプロットしてある。19の「日本モンキーセンター宮島研究所」が山口県の屋代島にあり、30の湯河原野猿公園が静岡県^{静岡}の富士山西斜面にあり、K 氏が見直しの手間をケチった為だろう。宮島は広島県だし、湯河原は神奈川県である。さらに言えば、湯河原野猿公園という名称は、天照山野猿公園の誤りである。

そういうのは単なる感嘆か、著者が地理に疎いだけなのではないか、と思う方もあろう。しかしそうではないのである。それは次を見ればわかる。

12. 犬山野猿公園。これは(財)日本モンキーセンター直営の野猿公園で、モンキーセンターや京都大学霊長類研究所と同じ犬山市にある。これが前記の地図では、はるかに東へズレた所にプロットしてあるのである。

さらに3、かの有名な高崎山。ここは K 氏の主たるフィールドであったはずの所である。これが地図の上では北西へ数10 kmズレて、国東半島の北側に図示してある。K 氏が高崎山の位置を知らぬはずはない。となればこれは、K 氏が作図の手間を惜しんで他人にまかせた上、見直す手間さえもケチったことに由来する間違いであることは明らかである。原因はケチなのである。

42ページ。「高崎山」と題した写真がある。しかしこれが、高崎山ではなく愛知県犬山市の大平山(前出、犬山野猿公園のある所)であることは、高崎山と大平山へ行ったことのある人には一目瞭然である。K 氏がこの両者を間違はずがない。するとこれは、高崎山の写真

をさがす手間をケチって、大平山の写真を代用したということだろう。

54ページ。「オスとメスの順位」という写真。写っているのはメスが2頭でオスではない。これも代用品だろう。しかしそれだけではない。

169ページの写真が54ページのものと同じなのである。この写真には「サブリーダーも尻尾をあげて威張ることがある。しかし、リーダーが近づくとへっぴり腰になり、やがてたてていた尾を下す」とキャプションがついており、オスとオスという扱いなのである。メス2頭が写った1枚の写真で、「オスとメス」も「オスとオス」も済ませてしまうのだから、これをケチと言わずして何と言おうか。

くり返しになるので以下は簡単にするが、80ページの「順位」という写真には「一番リーダー（右）が横を通ると、二番リーダー（左）はへっぴり腰になって道をよける」とあるが、左のサルは堂々たるオスで右のサルはメスである。

226ページの「ディスプレイ」という写真には「リーダーは、ものにしようと思うメスの前で優美な性のディスプレイをする」とある。写っている2頭は共にオスである。

このように、K氏は適当な写真を選ぶ手間をケチり、違う写真で間に合わせるといったケチぶりを発揮した、ケチの権化のような本づくりをしているのである。きっとケチの国からケチを広めに来たに違いない。

以上、「ニホンサルの生態」からいくつかの例をあげて、K氏のケチぶりの一端を紹介してみた。念の為断っておくが、この序論ではケチについてのみ論じているのであって、前掲書の内容の事実との相違、論理的不整合等については、何も言うつもりはない。

そんなことしてたら、向う何号かにわたって生物学会誌を乗っ取らねばならないし、<乗っ取ってよ ー 会長> もしそうしたとしても、会員諸氏のヒンシュクを買うのがオチだもんね。<当会会員もたいてい“ケチ”だから、“ヒンシュク”なんて買わないよ。もらうのは好きだから、“ヒンシュクをもらう”と書かなければいけない>

文責：青 丹 斎

ある春のうららかな日のこと。

日本生物学会中国支部組長の私は、部屋の外へ出て学生版日本コン虫図鑑をめくりながら一人、もの思いにふけていた。双シ目と膜シ目のページを交互に開いて見ていた私の前を、品の良い二人連れが急ぎ足で通り過ぎていった。いわゆるフルムーン旅行客といった風体である。どうやら次のロープウェイで下山するようだ。

私は別に気にもとめず、図鑑に見入っていた。〈そういえば、あれはアリだったかハチだったか……〉 去年の真夏日に、獲物をつかまえて、ズルズルと巣穴まで運んで行ったあのハチのようなアリののような虫はなんだったのだろう……。半ば気まぐれに学生版日本コン虫図鑑を持ち出してきた私は、とりあえず膜シ目を丹念にながめてみることにした。

ん？ もうとっくに通り過ぎたと思っていた二人連れが、目の前に立っている。

「ほおー、みやじまやえんこーえんかあ……」

部屋の入口にかかっている〈宮島野猿公〉という看板を、紳士が声を出して読み上げたのだった。その紳士はつついて入口のわきにかかっているもう一つの看板に目を移した。が、その瞬間、驚きのあまり声が出ないというような顔をして、奥方と覚しき婦人の方をふり向いた。

「お、おい、こりゃ大変だよ!!」

明らかに、その紳士は動揺していた。あたりにはただならぬ気配が漂ってきた。紳士はうなるように「いやー珍しい。こりゃすごい。(看板を指差しながら) この会員なんて日本でもそんなにいないんだよ……」とつぶやいている。奥方も紳士につられて、あらっまあ、大変というようにそわそわしている。

「この人はいないのかしら」という声がとんできた。私はあわてて顔を伏せ、そして、意味もなく学生版コン虫図鑑の監修者名を食い入るように見つめていた。

〈やれやれ、いつもの感違いか〉と私は小さくため息をついた。

そうこうしているうちに、紳士は部屋の中に入ってしまった。ガラス戸越しに、紳士が背広の内側へ手をやってゴソゴソやっているのが見える。どうやら名刺でも出てくるらしい……おっとやっぱり名刺だ。机の上に置いて行くつもりだろうか……。

私は相変わらず学生版日本コン虫図鑑を手にしたまま、〈わしゃ知らんでー〉を決めこんでいた。 (日本生物学会 中国支部 組長 春咲 小紅)

双眼鏡片手に歩いて来た中国支部事務局長こと拙生、部屋の中に見知らぬオジサンがいるのを不審に思い立ち止まると、「こちらの方ですか？」と御婦人から声がかかる。うなづく御婦人は「あなた、こちらの方が」と連れ男性に告げ、紳士が名刺片手に部屋から出て来た。

支部組長は知らん顔でフン虫か何かの絵に見入っている。また例の誤解か、面倒だな、と思う拙生であった。

中国支部に生物学会関係者が来たことはもちろんある。あるんだよねこれが。東海支部長も来たし学会誌の表紙の絵を描いている人も来た。でもこの辺はみなサル屋であって、いわば身内である。それ以外の会員は来たことがない。看板を出して何年になるか忘れたけど、<君とこが“使いふるしのマナ板”の看板をかかけたのは、1984年9月だよ。本誌21号766ページ参照のこと — 会長> 一度たりともないのである。

渋々名刺を受け取る。〇〇大学教授とか農学博士とか書いてある。こりゃいかんと思う。真面目な人に日本生物学会の何たるかを説明するなんて、こりゃ、わずらわしいぞ、と。

「実は私、会員なんです」と紳士は直う。こういう誤解をしている人はいよいよ困った、と拙生は思う。組長は知らんぷりをしてるんだな、と腹が立つ。支部長は（生家が電気屋なので生来電気工事を好み）、ロープウェイのトイレの電気工事を見物に行き留守だ。

「それがですね、日本生物学会というのですが、これが……」と拙生、口を開く。こうなると少しは話さないで仕方がない。

「ええ、私、不名誉会員で……」と教授。あ？ 不名誉会員？ じゃ本物じゃないの！

「奥野先生に伺ったんですが、日本には動物学会と植物学会はあって……」奥野先生！ 会長のことじゃないの！ ころ魂消た！

「これはどうも…… 今すぐ支部長を呼びますので……」と拙生。

「支部長？ はあ、勝手に名乗っている方」と教授。

ここまで黙って聞いていた支部組長、学生版日本コン虫図鑑片手にトイレに向かって走り出す。

「支部長！」支部長と呼んだ方も初めてなら、呼ばれた方も自分のことと思っていない。

(中国支部 事務局長 青丹斎)

「シブ長、シブ長」と興奮した声が聞える。電気工事の監督で忙しいところなので、「ナーニ、どうしたの」と気の悪い返事しておいた。ちょっとしたことででもすぐ目を三角にして興奮するくせのある組長のことだから、こっちはちっともあせらない。「あの、お客さんです」「へー、どんなお客さん？」相突らずのうわのそら。

「不名誉会員の方、生物学会の」とこんどは倒置法ときた。強調の表現である。これは効いた。「えっ」と驚くまもなく、組長を残して30 m ダッシュ。そのわずかな時間のなかでいろ

んなことを考えた。「ここに中国支部があるのを知って来たものだろうか。ひょっとして会長の差し金か？ なにしろ本を送ってまだその書評も書いてないし、ハゲのケチ話もそのまま。学会誌の原稿集めに間違えを放ったか。そういえば最近学会誌は出てないぞ。言動には注意しておこう。」頭の回転が早いのか、はたまた足が臭かっただけのことなのか、とに角いろいろ考えた。

「はい、私が支部長です」と威儀を正して名乗る。「あ、勝手に名乗っている方」と軽くいなされた。敵もさるものである。「ハッハッハッ」とごまかしてはおいたが、内心おだやかではない。「私、不名誉会員として、奥野先生に……」会長のことを「先生」と呼んだ人は、私の知る範囲ではこの人が初めてであった。＜交友関係が狭いね＞ この辺が実に怪しい。「本当にびっくりしました。こんな所にもあるんですねえ」そう、こんな所なんです。悪いか。とは言えなかった。「いやいや、この旅行での大収穫です」えっ、こりゃほんまもんだ。これが演技だとしたらたいしたもんだ、と思った。＜この人は、かつて、20年ほど前に、もっと大した“演技”をやった人なんやで＞

「看板まで出して……。ひとつ記念に写真でも撮りましょう」ということになった。「日本生物学会中国支部」の看板を間にはさんで記念撮影ということになった。一枚撮ったところでカメラがぶれたとかで、奥さんに「もう一枚」と命じた。なにしろ中国支部の最高幹（患）部との記念撮影なのだから緊張するのもやむをえないのだろうが、なかなか汎帳面な人のようだ。これで安心したのが、学会のことはそれ以上触れず、おみやげのモンキータイムズをもって帰っていた。

後日、写真とともに購読料+カンバが送られてきて、めでたく「宮島のサルと博物館活動を守る会」の会員となられた。まずはめでたしめでたしである。

ところで、ここにこうして手紙を差し上げたのは、＜これは“手紙”か。投稿“論文”やと思うて、表題までつけてやったのに＞ 不名誉会員来訪のてんまつを報告する義務を感じただけではない。これを機会に「宮島のサルと博物館活動を守る会」のプロパガンダをしようと思っ立ったからである。

日本生物学会の諸君！ 我々は日本三景の一つ、宮島にあってある闘いを展開している。それがどういふものかはここでは言わない。何も言わずに「モンキータイムズ」を読んでみてほしい。年間購読料は1,000円、カンバは無制限、＜とって、リグルートなみに出すと何をやるかわからないから、ほどほどに＞ を郵便局で支払えば、君もすぐに会員資格が得られ、「モンキータイムズ」を読むことができる。「守る会」の会員資格を得ると、きらわれることはあっても得することは何もない、といった特典が与えられます。

さあ、すぐに1,030円持って郵便局に行こう。振込先は、

[Redacted text block]

です。

(日本生物学会 中国支部長 免毒齋八眼太)

アルフレッド・ラッセル・ウオレスが自然淘汰による進化を思いついたのは、マラリアに患って高熱を出した時だったという噂があるが本当だろうか。

日本生物学会東海支部長が、この4月マラリアで死に損なったという話を報告しておこうと思い、ペンをとった。

南米のサルを調査に出かけ、帰国直後に発病した K 氏は、マラリアであると主張したものの医者にはなかなか信じてもらえず、病院で気を失なっただけらしい。

K 氏重病の報に、K 氏とは長い付き合いの日本本生物学会会友 M 氏は急いで病院に駆けつけた。

「大丈夫や言うなら行かへん。面会謝絶や、明日をも知れぬ状態やと聞いたから行ったんや。K かね、もしほんまに死ぬなら、言い残したいことの二つや三つ、あるかもしれへんしな」とのことであった。

この辺の事情を K 氏に問うと、「おっさん来てくれはった時は、一番熱が酷くて弱ってた時やった。そこへ来てあのおっさん、何か思いつかへんか、いうて聞かはってな。全く見舞いに來たんか殺しに來たんかわからへんで」と言っていた。

幸か不幸か、K 氏はウオレスのようなインスピレーションを得ることはなかったらしい。進化論のプライオリティーについては、ダーウィンかウオレスか、一部で取沙汰されているが、何も思いつかなかったのでは仕方がない。

もしも K 氏が病床で何か驚天動地の発想を得ていたら、そしてそれを M 氏に遺言して息絶えたりしていたら、K 氏は日本のウオレスなんてことになっていたかもしれない。

「K 氏はマラリアで落命したのではない。M 氏にしめ殺されたのだ」なんてことを書いて、日本生物学会誌などではない、もっと売れそうな雑誌に持ち込めば、私も一もうけできたかもしれない。

幸か不幸か、K 氏は何も思い付かず、そして幸いなことに一命を取りとめ、先日やっと社会復帰をとげたらしい。進化論に新たな地平が拓かれなかったのは残念だが、生物学会は東海支部長を失わずにすみ、まずはめでたしめでたし、ということにしておこう。

(中国支部：青丹齋)

{ 真面目な会員の皆さん、サル屋とはあまり付き合わぬようにしましょう 一 会 長 }

1 大学とは行ってもしょうがないけど行かなきゃ困る所

今日社会に出るにあたって、大卒という資格は当然の前提として要求されます。さらに理工系では、修士修了が前提として求められるような方向に向かいつつあります。しかし4年や6年も大学にいととんどんバカになってしまいます。＜入学した時にすでに病状は進んでいるから、心配することはない — 会長＞

2 「先生先生と威張るな先生、先生生徒の成れの果て」

大学に長くいればいるほどバカになるので、院生である私はすでにだいたい脳を冒され、教授ともなると廃人同様です。「先生と呼ばれるほどの馬鹿でなし」と川柳にもよまれ、キャバレー＜古いね＞でも「ほとんどの客は社長か先生と言っておけばきげんがよい」とホステスに馬鹿にされています。＜自分がそうだからといって、他人もそうだと思っはいけない＞

3 学生は単位の奴隷なり

天国のような学生生活、我が世の春を謳歌する学生にとってただ一つ怖いものがあります。それが単位です。単位はロシアンルーレットと同じです。ある教授は自宅の階段の下に線を引き、階段と上から答案の束を投げます。すると答案は空中でひらひらと舞い、あるものは遠くに、あるものは近くに舞い降ります。そしていちばん遠くの線を越した答案には A、次の線は B、そして次は C、運悪く階段の途中に落ちた答案には D をつけるのです。＜平家に住んでる教授はどうするのだろうね＞

4 講義に出席すべからず

講義の内容ははっきり言ってくだらなくつまらないものがほとんどです。自分が本当に興味あるものだけに出席し、あとはサボるのが適切です。ただし試験の準備はちゃんとする事！ 試験前に過去問や演習の問題をきちんと理解して解けるようにしておけばまず大丈夫です。＜“ロシアンルーレット”でも予習しておけばよい結果が出るの？＞ その

ためにノートのコピーとプリントと教科書は入手しましょう。<いいことを聞いた。自分の本を教科書に使うことにしよう — 教授> 講義に出席などして時間を浪費しないで大学生活をエンジョイすべきです。講義に出席するくらいなら家で寝ている方がまだましです。<講義に出なければ、それが“くだらなくつまらぬ”ものかどうか、わからないではないか。大学の講義がいかにつまらぬものか、学生に15回かけて骨の髄まで体得させるところに、大学の講義の真髓がある — 大学教授>

5 成績は気にするべからず

高校時代の延長で成績は良くあるべきだと思い込んでいる人がいますが、これは無意味です。理科大は入学の時から学科が決まっているので学科分けは当然ありません。研究室分けも成績よりじゃんけんの強さで決まります。就職も理工系が引っ張りだこなので、成績なんか全然関係ありません。大学院の入試も一発試験なのでこれも関係ありません。要するに単位さえ来れば A でも C でも全く変わりはないのです。<好況がいつまでも続くなどと思うなよ — 昭和ひとケタ>

6 留年は避けるべし

留年は非常につらいものがあります。これは経験した者でなければわかりません。D だけは避けるように。そして安全のためになるべく多くの科目を履修申告することです。どうせ出席しないのだから、恐れずたくさん申告できます。ちなみに理科大は留年の多いことで全国的にも有名です。<履修申告していないのに単位が出て、なかなか留年させてもらえない大学もあるよ — 会長>

7 規則は破るためにあり

大学は学則に基づいて動いています。したがってちょっとやそっと規則をやぶったり教授とけんかしたりしても何も困ったことは起こりません。<この2つの文章は論理的に不整合だね> 別に教授の言うことを無視しても相手はどやしようもないのですから。<どうしようもあるよ。単位認定権が教授にあることをお忘れなく> 頭にきたら我慢せず、ガンガン言ってしまうことです。参考までに一度理工学部学則を読んでみましょう。

8 大学生活を楽しむべし

企業は新入社員に対して、大学で勉強したことなど何も期待していません。自社で育てるからです。むしろ人間的に魅力のある人を求めます。大学はくだらない知識を身につける場所ではなく、あなた自身をみがくところですよ。<企業のために“みがく”のかね>

9 これだけは人に負けない、というものを一つは持つべし

自分に自信のある人は魅力的です。<自信も過剰になると醜悪です> 大学時代にこれだ。

けのことをやった、これだけは人に負けないというものを何か一つは持てるようにしまし
ょう。〈全講義皆出席というのはどうかね。まず人には負けないよ〉 人間4年間も一つ
のことを本気でやれば相当のことができます。これからあとの人生において、大学時代ほ
ど時間が自由に使えてしかも社会的に何でもできる時期はありません。〈会社や役所には
いっても、仕事を干されたら充分ヒマはあるよ。給料もくれるしね〉

10 サークルにはいるべし

とにかく何でもいいからサークルにはいりましょう。クラスの人しかつきあいが無いとい
うのでは味気なさすぎます。部室があれば居場所ができるので何かと便利でもあります。
大学というのは決まった居場所がなくて不便ですから。2年生から去年の試験資料をもら
うこともできます。何かと情報に遅れることもありません。〈ランチに合って命をおとさ
ないようにして下さい〉

11 親友をつくるべし

大学時代の友人は一生の友人になります。利害関係の全くないつきあいができるからです。
〈そうかしらん?〉 就職してからの友人とはどこかに利害関係があり、本当に気やすく
つきあえるようにはなりません。〈親友とは“つくる”ものではなく“できる”ものだと
思うが、違うかね。気やすくつき合うために友人をつくるのでは、初めから利害がからん
でいるのではないかね〉

12 男女交際すべし

あなたが男性なら、積極的に女性の友人を多数つくるべきです。理工系にいとたださえ
まわりが男ばかりなので、女性の友人はちっともできません。非常なる努力をしてやっ
と半々になるくらいです。例えば女性の多いサークルにはいるとか、学外の友人を多数つ
くるとか、がんばってください。〈言われなくてもがんばるよ — 1年生〉 理科大に
来たのが運の尽きです。

もしあなたが女性なら(もし今年いたら)、何も心配することはありません。良さそうな
人だけ相手にして、あとは無視しても大丈夫です。〈言われなくても自分で選びます。学
内にはいそうにないけど — 女子学生〉

13 バイトすべし

まず経済的な基盤を作ることは重要です。もし可能なら生活費や授業料まで自分で出せば、
本当に何でも自由にやれます。いちばん手軽なのは何といっても家庭教師です。まずこの
あたりから始めてはどうでしょうか。この他にも理工系なら時給2000円以上クラスの
仕事が探せば結構あります。情報通信の分野がねらい目です。〈ご親切に忠告ありがとう

— 1年生>

14 車に乗るべし

まず免許をとりましょう。車があると単に便利というだけでなく、生活が、そして発想までも変わります。<おとなしいフルートという犬が、ハンドルを握った瞬間にオオカミに変身するという、ディズニーのマンガがあったね — 会長> 時間的、空間的に自由になれるからです。<何が自由だ！ — 高速道路の渋滞にまきこまれたドライバー> 車があるとバイトもスムーズにできます。車は高いと思うかも知れませんが、走りさえすれば良いというのなら5万円も出せば買えます。<車くらいは、命令されず、自分の意志で買いたい！ — 1年生>

15 東京を活歩すべし

もしあなたが地方出身者なら、東京に近い野田に来て幸いです。ぜひ多くの機会を作って東京を歩き回ってみて下さい。東京は魅力的な町です。東京は特別なのです。<大阪も金沢も“特別”だよ — 会長> でも東京の人は通りがかりの人には冷たいので、これはあまり気にしないで下さい。<生き馬の目を抜くようなこともあります、これも気にしないで下さい> 東京ではべとべとしたつきあいはきらわれ、あっさりしたつきあいが好まれます。

もしあなたが東京出身者なら、野田に来てお気の毒です。

16 生協を活用すべし

大学生協は食事、書籍、文具、チケット、電化製品、CD 等何でもそろって大変便利です。<そんなごと一度行けばわかるよ> これを活用するのは大学生活の必要条件なのですが<もっと大切な“必要条件”はないのがね> 残念ながら野田キャンパスには生協がありません。困ったことです。<なるほど、ないものを活用しようと思ったら困る わな。論理的だね>

17 宗教にかかわるべからず

春になると新生をねらって新興宗教が盛んに勧誘活動をします。知らない土地に出て来てさびしそうな顔で歩いていると標的にされてしまいます。いかかわしいアンケートには一切答えず、相手もせずに見捨てることです。両親が「XX教被害者父母の会」の会員にならずに済むように気をつけましょう。せめて試験中くらいお祈りをやめてもらいたいものです。<信仰の自由を認めよ！— XX教>

18 政治にかかわるべからず

この世の中、政治の世界ほど醜く汚れたところはありません。学内にも妙な政治団体があ

りますが、かかわるとろくなことはありません。ノンポリがスマートです。しかし!! お兄さんは怒っているのだ。リクルートと消費税はいったい何ということでしょうか。今度の選挙はちゃんと自民党以外の所に投票しに行きます。<最後にやっと“自分”が出たね。「投票に行くべし」と書いてるんじゃないかと、ひやひやした 一会長>

追 記

本稿は、有志発行で学部新入生に配布した「土木学科へのいざない」に掲載したものを一部修正したものである。最初、「何か原稿を」ということで依頼されたが、書き上げてみると一部教授の不興を買いそうな内容だということでボツにされそうになった。(土木学科には土建屋出身の教官が結構いる。)そこで、せっかく書いたのだから日本生物学会誌にでも送ろうかと考えていたが、結局ボツにはならなかった。しかしせっかく送ろうかと考えていたので、そのまま投稿したのである。<会長の苦勞がわかるやろ>

内容が一部部外者には判りにくい所があるのでその点について説明する。<それはご親切に>

12 学科の新入学生は150人余で、このうち女性は5人だった。しかし例年は0~2人である。

17 大学の隣に「靈波の光」という宗教団体があって、白装束に身を固め毎日「しあわせこおーい、しあわせこおーい」と大声でお祈りをしている。実は土木学科の教室が1番近いのでけっこううるさいのである。

日本生物学会会長室のご案内

第4編集局長

昨年3月のことである。たまたま日本生物学会本部、つまり金沢大学理学部生物学教室生態学講座第1研究室、略称1研に顔を出した時、いきなり会長から、「ああ、ちょうどよかった。第3編集局長が就職しよるから、君を第4編集局長に任命する」と宣言された。私だって、金沢には住んでいるが、れっきとした職を持ち、ヒマな会長とは違って、毎日忙しく働いている労働者である。とてもそんな重責には耐えられない、とひたすら固辞したのだが、ご存知のとおりそんなことで前音をひるがえすような会長ではない。本人の意向を全く無視して決めてしまい、本誌第26号で公示してしまった。

こうなれば仕方がない。あとはストライキ<サボタージュやろう — 会長>に徹して、会誌の発行を阻止する以外にない、と固く決心したら、この1年全くお声がかからなかった。珍しく会長は忙しくて、生物学会誌をつくっているヒマがなかったのである。そして私は、この4月付で東京への配転が決まった。全く何もしなかった編集局長第1号だとひそかにほくそえんでいたのだが実はそれは甘かった。先日、ふとした出来心で学会本部を訪れたところ、たちまち会長につかまり「おい、3月中に27号を出すから、原稿100枚分集めてこい」。

「そんなこと、急に言われても、できませんよ」「そうか。そんならその分、君が責任持って原稿書け」「ムチャですよ、それも」「君が書かんのやったら、君の代わりにオレが第4編集局長名で、書いてもええで」

これが単なる脅迫ではなく、本当にやりかねないから、会長は恐い。

というわけで、この一文を書かざるをえなくなった。何を書いても、すべての責任は会長にあることを、ここで宣言しておく。

まず、日本生物学会本部の様子から紹介しよう。

部屋の中央部を大きく占拠しているのは、応接セットである。といっても、百貨店の家具売場にあるような立派なものを想像してはいけない。長イス1つ、ソファ—3つ、机が2つと数はそろっているが、これが実は4種類のセットのなれの果てであって、しかもすべて、どこかが捨てた中古品ばかりだから、見るも無惨な惨状を呈している。かつて、見たところ豪華でありながら底の抜けているソファ—があって、うっかりすわるとめりこんでしまった。これを会長は、「2度と立ち上れぬ打撃を与えるイス」と称して、学生をすわらせては喜んでしたが、遂に学生が反乱を起こし

て捨ててしまったから、今はない。ところが、その時代わりにと、大学のゴミ捨て場から学生が持ち込んだ長イスが、そろそろ底が抜けてきて、「2度と立ち上れぬイス」第2号になりつつある。そのうち、うっかりすわった人がギックリ腰になるに違いないと、私はひそかに心配しているのだが、進言しても言うことはきかないだろうから、最初の犠牲者が出るまで黙っていることにした。初めて本部を訪れる人は、くれぐれもイスには用心していただきたい。

机の上には、本や雑誌や書類やらがうず高く積み、そのわずからすき間に、灰サラやコーヒー茶ワンやスプーンが散在し、机の表面はまず見えない。ゼミを始める時はたいてい、会長のテキストを、このカラクタの山の中から探がし出さなくてはならない。<みんなが本をひっぱり出して元へもどさんからこうなるんやないか — 会長>

壁の一面には、天井までとどく本ダナがあって、本が2重にぎっしりつまっている。それでもはいりきらず、横に積み上げてある所もあり、必要な本はなかなか見つからない仕かけになっている。本の種類は種々雑多で、「アナグマの森」のとなりに「原発ジブシー」があり、「プラトン選集」と「動物系統分類学」が同居しているといった調子である。中でも異彩を放っているのは、中央公論社の「世界の名著」全66巻であって、第1巻の「原始仏教・バラモン教典」から第66巻の「現代の科学・I I」まで、古今東西の哲学者・思想家の名前がずらりと並んでいる。会長によると、生態学には数学よりも哲学が必要なのだそうで、哲学とは全く無縁の最近の学生に、ちょっとでも親しませるために、わざわざ家から運んできたのだそうである。ところが、これらの本をひっぱり出す学生は皆無であって、貴重な本ダナを占領し、ほこりをかぶっているだけらしい。さる筋から聞いた話によると、この全集を購入したのは、小学校の教員志望であった学生時代の会長の息子さんであり、会長ではなかったらしい。<金はオレが払わされたのだ — 会長> 彼は、どういふわけか教員ではなくレントゲン技師となり、もはや必要ではなくなったとこの全集を会長の家へ持ち込んだ。置き場所に困った会長が、1研へ運んだというのが真相である。その証拠に、66冊の大半は、本を開いたあととさえない。なお、会長の名誉のために言っておくが、生態学の専門書ももちろん並んでいるが、たいてい2重の奥にかくれていて、外からは見えないようになっている。

この部屋の大きな特徴の1つは、めったに掃除が行なわれないということである。机の上が乱雑である上に、床の上にも小さな紙くずやほこりが散らばっていて、きれい好きの人は訪門しない方がよい。会長はきたな好きで、きれいな部屋では落ちつかないそうである。きたな好きな学生もいて、よくこの汚ない部屋の、「2度と立ち上れぬ」イスにすわりこんでいる者もいる。ドアの上には天窓があるが、たいていの人にはスリガラスだと思っている。しかしこれは、まぎれもなく透明ガラスであって、汚れて不透明になっているだけなのである。何しろ、ここ10数年、ふいたことがないのだから。おまけにこの天窓のガラスには、X印にガムテープがはったままになっている。

これは、やはり10数年のむかし、ある1人の学生がこの部屋を封鎖して立てこもった時の名残りであるらしい。歴史を重んじる会長は、古いものを捨てずにみんな残しているものだから、いよいよ部屋はきたなくなってしまう。学生がつくらず天井からぶら下げていたカラスのはくせいさえ、いまだに机の下に鎮座ましましている。

窓に向かって奇妙な形の机があり、その上にもうそろそろお役ご免にしてやらないとかわいそうなくらいおんぼろの、機械が1つ載っている。これこそ、日本生物学会創立以来、会長の酷使に耐えて、学会誌をつくりつづけた「和文タイプライター」である。学会誌だけでも1000ページに近いが、それだけではなく、組合の機関誌や反原発のパンフレット、その他さまざまな文書にも登場し、これまで一体何字打ったかだれにもわからぬほど使いこまれたタイプである。学会創立のころはまだワープロもなく、この和文タイプでも新鮮な感じがしたものだが、これだけワープロが進化し普及した現在では、いかにも古めかしく時代おくれといわざるをえない。学会誌もそろそろワープロにしたらどうかと、心ある会員はみんなすすめているのだが、会長はなかなかうんとはいわない。「オレは、見えないところで何をやってるかわからんような機械はきらいだ」というのが会長の言であるが、大枚20万円も払って買ったタイプを、そうやすやすと捨てられるか、というのが本音らしい。この調子だと、括字がすり減ってわからぬようになるまで放さないのではなからうか。

もう1つ、会長によって酷使されている機械がある。それは、本部には置いてないが、印刷機である。すでに2回オーバーホールを受けているが、修理した製造元の社員は、「うちが納入したこの型の印刷機の中で、石川県で第2番目によく使われている機械です」と言ったとか。ちなみに第1番は、石川県評に納めた機械だそうである。おんぼろタイプで打った原稿をおんぼろ印刷機にかけるものだから、近ごろの学会誌はとみに読みにくくなっているのだが、昭和6年生まれの方の会長の方針精神は、そう簡単に直るものとは思われず、会員の皆さんには当然読みづらいことを覚悟しなければなるまい。＜これは“ケチ”ではない。ものを大切にやる精神といってもらいたい＞

ついでに、会長のケチぶりを2～3紹介しておこう。印刷の時、どうしてもインキがはみ出すことがある。それをふくのにティッシュペーパーがおいであるのだが、たまに手伝いにいって、うかつに使うと怒られる。ティッシュペーパーは、ご存知のとおり2枚1組で出てくるが、会長はそれを1枚づつはがして使うのである。そして、使った紙を箱に入れてとっておき、乾いてからまたしわを伸ばして広げ、もう1回使う。戦時中ではあるまいし、何もそこまでしなくても、と私などは思うが、会長は2枚1組のティッシュペーパーをそのまま使って捨てるなどということとは考えられないらしい。＜戦時中のエンタツ・アチャコの傻才に、新聞紙を切って鼻をかみ、それを広げて干してトイレで使う。この間、順序をまちがえて逆にしたら、いやもう臭うて臭うて………というのがあったよ＞印刷したりコピーしたりすると、まだ裏の使えるホゴ紙がたくざん出る。これも

また捨てられず、たくさんたまるとその裏は原稿用紙を印刷する。かつてこの教室で学生が運動していたころ、大袋に出した教官批判のヒラなども、みんな原稿用紙に化けていて、1研の戸ダナに積み上げてあり、たまに昔の学生がやってくると会長は、わざわざその原稿用紙を渡して、「学会誌に何か書け」と脅迫する。裏を返せば、学生のころの自分の筆跡が出てくるのだから、卒業生もたまったものではない。会長が原稿をよく書くのは、つくりすぎた原稿用紙を使わなければもったいないという、脅迫観念のなせるわざかも知れない。ワープロにしないのも、そのためにちがいない。

このケチな会長が、ただひとつ気前の良いことをしている。それは、1研には常にコーヒーが用意されていることである。私が学生のころはまだインスタント・コーヒーであった。出入りする学生が多かったころは、ネスカフェの大ビンが1週間くらいでなくなったそうである。日本が世界一の金持ちになった近ごろでは、1研のコーヒーもレギュラーに格上げとなった。ケチな会長<ケチではない！ 会長>がなぜコーヒーだけは惜しまないのか？ 一部の教官の間でささやかれている世にも恐しいうわさを紹介しておこう。それは、1研のコーヒーには極微量の精神改造薬が含まれていて、何も知らずに飲んでいるうちに中毒し、精神構造が変わってしまう、というのである。徐々にきいてくるから、当人の全く気づかぬうちに変わってしまうという恐しさである。全く根も葉もない単なる“うわさ”であると私は思うが、全くしゃべらず笑わなかった学生が、1研に出入りするようになってから、朝から晩までニヤニヤしはじめた、といった例が2~3あるので、これから1研に出入りしようと思う学生は、一応用心した方がよい。

もうひとつ、これは会長から直接聞いた、たしかな理由がある。会長はひそかに、何月何日何の何がレがコーヒー何杯、と手帳につけているそうである。「オレがクビになったら、その手帳を持って卒業生を順番にまわり、脅迫して飯にありつくんや。利子がつくから、まあコーヒー1杯で1宿1飯くらいにはなるやろ。これで当分食っていける」。

もっとも、生物学会本部、すなわち1研の本当の恐しさはコーヒーではない。生物学科の教授方の認識では、この部屋は“大学にはあってはならない部屋”であり、そんな所に学生が出入りすることは許されない部室なのである。だれとだれとが出入りしているか、などと調べている教授もいるらしく、さまざまないやがらせをされた例もある。特に、大学院へ行きたい学生は、試験に通るまでは近寄らない方がよい。1研によく出入りしていたある他学科の助教授の教授昇格人事のとき、生物科の教授から注文がついて、大いにもめたという話もある。ともかく1研は、学生にとって大変危険な部屋であることはたしかであり、不用意に近づかぬよう、先輩としてくれぐれも忠告しておく。

というわけで、第4編集局長としての私の義務もこれで果たしたと思う。第5編集局長がだれに

なるのか知らないけれど、よろしく願います。私は、会長の下からはなれ、東京へ行って大いに羽根を伸ばすのだ！ <甘いね。東京には会長より恐しい東京支部長というのがいて、とうてい自由の身にはならない。早速連絡しておくことにしよう — 会長>

{ 編集局からのお知らせ- その1 }

本誌に好評、かどうかわからないけれど、連載、といっても2回だけだったが、中の、水原洋城著「猿学万歳」が、本誌が1年6か月の休暇をとっている間に、単行本として出版されてしまいました。ご承知の通り、本誌は「許可無断転載」をうたっておりますので、一向にかまいません。ところが、日本の出版界全般はまだ、「禁無断転載」というおくれた状態に停滞しておりますので、この続きを本誌に載せるわけにはいかなくなりました。つつきをご覧になりたい方は、本をご購入の上お読み下さい。会長は著者から献本を受けているはずなのですが、心なき学生が持ち出したのか、それともうず高く積まれた1研の本の山の下に埋もれてしまったのか、見当りません。会長のおほろ気な記憶では、「たしか、光文社のカッパブックスやなかったかな」ということです。違っていれば次号で訂正します。

ついでに、すでに本文中で本人がふれています、会長もまた向うみずにも、「魚陸に上る」を出版するつもりです。この方は大阪の創元社から10月中には出るそうです。ただし表題は、「魚陸に上る」を主張する会長と、「人はむかし魚だった」にしたい出版社の間で現在論争中で、どちらになるかわかりません。妥協の産物として、副題の「魚から人間までの歴史」が主題に浮かび上るかも知れません。

こちらの方は、本誌に連載中の「魚陸に上る」とは違うものだそうで、会長は連載を強行するつもりようです。だから、本誌さえ見ていれば本を買う必要はないとのことです。

(第5の1編集局長)

< 編 集 後 記 >

今年度は出ないだろうとタカをくくっていたのに、会長はどうしても3月中には出すと言う。真藤会長は逮捕されたけれども、同じ会長でも日本生物学会の会長は逮捕されそうにもない。<だれもリクルート株、もってきてくれんもんな。せいせい“聖護院ハッ襦”くらいしか会長室にはとどかん — 会長> それで編集後記を書かなければならないハメに陥ってしまった。

1年に少なくとも1号は出さなくてはならないと、いかにも律気に会長は言う。けれども会則に、原稿が集まらなければ永久に出ないと明記してあるように、本当の理由は別にある。<君は、“法的”責任のほかに“道義的”責任なるものがあるのを知らんのか。そんな認識不足では、責任ある地位につけるわけにはいかん。やはり、補佐止まりやな — 会長> <初めから補佐以外になるつもりはないと言ってるじゃないですか — 補佐> <自分の原稿の中に自分で発言するな。ややこしいではないか — 会長> 日本生物学会の本部に行くと、たいていいつも何人が学生がいたのに、近ごろあまりいない。今時の学生は、特に4年生は卒業前に、何ヶ月も外国へ遊びに行くんだそう。<半月くらいだよ> 今人気のオーストラリアや西海岸に、日本の学生がワンサと押しかけるんだそう。<残念でした。今年行ってるのはインドに1人、マレーシアに2人だよ。昨年オーストラリアへ行った第3局長よりマジメだよ> 私は一度も日本から出たことがないので、うらやましくて、ヒガんでいるのだ。<そのうち、国際海綿学会が講演旅来が来るから、ヒガムなよ> それはともかく、会長の部屋にだむろしていた学生が外国へ行ってしまったので、彼等に付き合わされていた分だけ会長はヒマになったのだ。<そんなことはない。新たにドクター院生やら新4年生やらが、呼びもせんに押しかけてきて困ってる。その証拠に、最近温泉へ行けてない>

会長がヒマになった理由は、他にもある。日本生物学会誌の読者なら、皆知っていることだけれども、会長にとってこの世で一番コワイ人は奥さんと、二番目が有名なFさんなのだ。ところがこのFさんが、アメリカでのシンポジウムに招待された。それで、今や国際的研究者になるべく<もうちょっと手おくれだと思うけど>カリフォルニアへ出かけて行って、1ヶ月半も帰って来ないのだ。つまり、世の中で二番目にコワイ人からの指令が来なくなって、その分もヒマになってしまったのだ。<これはたしかに一理あるが、コワイ人は二番目でしめいではない。三番目、四番目、五番目……が、次々と指令を出してくれている。なんて、世の中、コワイ人がこんなたくさんいるんだろう> そこでヒマを持て余した会長は日本生物学会誌を出す事にした、というのが本号の出版された本当の理由なのである。外国へ遊びにも行けず、おまけに編集後記を書かなくてはならないとは、何という不幸なのだろう。<結構楽しんでるくせに> せめて、ナカソネでも逮捕してくれ。

ところで、この編集後記は、第3編集局長の文体を真似て書いてみたものなのだ。しかし、ま

ったく内容の無い事を延々と書き続ける彼の文才には、遠く及ばないと深く悟らされてしまった。

<“知性と教養”がじゃまするもんね> 内容が豊かで、充実した日本生物学会誌の中で、内容のなさを光っていた第3編集局長の文章を読みたい！<就職して1年、苦勞の結果“内容”が充実してしまったから、もうあんな文章は書けない。内容のない文章の特許権は、第1編集局長補佐にゆずる

— 第3編集局長>

(ヒマつぶしをしている補佐)

<わざわざ断わらなくても、ヒマつぶししかしていない事は皆知ってる>

{ 編集局からのお知らせ- その2 }

1988年度(1988年4月から89年3月まで)には、遂に1号も学会誌が出ませんでした。当会は会誌が出ないとお金も出ていかないことになっていますので、会計上88年度はなかったこととなります。88年度分を納入された奇特な方が若干おられますが、これは89年度分にふりかえますのでご了承下さい。

(第5の2編集局長)

{ 編集局からのお知らせ- その3 }

第27号の原稿がそろって、最後にページ数を入れた時、遂に日本生物学会誌が千ページを越えたことに気づきました。「ネイチュア」や「サイエンス」なみに、ページ数を4ケタにしたいというのが、発足当時の会長の悲願であり、次号で、「千ページ突破祝」をやりたいと思います。会員の皆さん、祝辞をおよせ下さい。

なお会長は、次は5ケタをねらうのだ、と言っております。ちなみに、1万ページを越えるためには270号出さねばならず、1年2号出したとして130年ほどかかりそうです。最近生まれた会長のお孫さんにたのんでも無理なようです。

(第5の3編集局長)

(真 正 編 集 後 記)

日本生物学会なるものを久しぶりに思い出し、前号(第26号)をとり出して眺めれば、その日付は何と1988年3月31日になっているではないか。すでに1年6か月を経過し、1988年度は1冊も発行していないことになる。これが並みの学会であれば、会費のただ取りだとか何とか、会長の責任追及の声が入るところだろが、我が生物学会ではそんなことは起こらない。会則にはちゃんと、「刊行は不定期とし、原稿が集まり次第発行する。したがって、原稿が集まらなければ、永久に発行しない」と書いてある。この1年6か月の間に、会員からの投稿はたった4編17ページに過ぎない。本誌は1号44ページ建てだから、このペースでいくと、あと3年くらいは発行しなくてもすむ。そのうちみんな忘れてしまって、それこそ「永久に発行しな」くてすむかも知れない。本会の事業は会誌の発行だけだから、会誌が出なければ一切金は要らない。したがって、会誌を出さなかった年度は自動的に会費はとれない。その年はなかったことにしてしまうわけである。

といて、気にしていなかったわけでもない。今年の3月、何とか1号出そうとして第4編集局長と編集局長補佐に、編集後記の執筆を厳命した。「ホントに出す^トですか？」と深く疑いながら、2人は書いてきたのだが、疑いは正しく、やはり出なかった。2人の編集後記が時期を失しているのは、そのせいである。と断わらなくても、当学会誌の記事はすべて時期を失しているが。

4局長は全く何もせずに東京へと逃げていった。聞くところによると、それでも足りず、西ドイツはハンブルグまで高跳びしたらしい。そこで5局長を任命しようと思ったが少々おくらしている。人材不足なのではない。今年の4年生は、3年生の間に学年ごと落ちこぼれてしまい、そのうち数人が毎日学会本部にたむろしている。といてみんな学会に入会しているわけでもない。あまりに人材豊富なので、編集局長を決めかねているわけである。5局長だから5人でやらすことにしようかと思う。

発足以来の和文タイプは、酷使に耐えかねて遂にダウンした。このページは同型だが活字がひとまわり大きいタイプである。どこから手に入れてきたのかはきかないでほしい。汚職事件に発展するおそれがある。ここでは縮小コピーでそろえるが、次号からは、会員の老齢化に合わせて【会長の、でしょう - 5局長】字を大きくするかも知れない。

(会 長)

会 計 報 告

1987年4月 ~ 1989年3月

収 入		
100円会員	40人	4000円
1000円会員	90人	90000円
2000円会員	10人	20000円
寄 付	3件	1260円
前年度くりこし		122940円
計		238200円

支 出		
上 質 紙	22000枚×2円	44000円
表 紙	1500枚×3円	4500円
ファクス原紙	100枚×70円	7000円
印刷インキ	4本×900円	3600円
送 料	24、25、26号その他	110000円
封 筒	500枚×3円	1500円
計		170600円

差 引 次年度くりこし 67600円

{ 監査報告 }

勝 手 に し ろ !

日本生物学会会計監査 夢籍 忍次郎 印

日本生物学会誌 第27号 1989年10月10日

編集・発行

日本生物学会

金沢市丸の内1の1

金沢大学理学部生物学教室

生態学第1研究室内

編集無責任者

奥野良之助

許可無断転載